The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北村季吟の源氏学（一）：附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意　上』翻刻
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	詞林. 2015, 57, p. 36-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

北村季吟の源氏学（一）

――附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意　上』翻刻――

宮川　真弥

はじめに

従来、北村季吟の源氏学については、『湖月抄』への言及がその大多数を占め、その他の著述や関連書に及ぶことは稀であった。そこで、本稿以降数稿にわたり、『源氏物語』に関する季吟の著述等について概観し、そのうちのいくらかの翻刻を供し、以て季吟の源氏学の再検討を企図するものである。本稿では、主として季吟『源氏物語微意』の基礎的研究を行う。

一　『古今集并歌書品々御伝受之書』について

日本大学総合学術情報センターには、『教端抄』『源氏物語微意』など七種十九冊の伝授書類を一箱にまとめた『古今集并歌書品々御伝受之書』[1]（以下、「歌書伝受書」と称する）が蔵されている。これらは季吟から柳沢吉保への伝授書であり、箱書に「古今集并歌書品々御伝受之書」と記す朱の塗箱に納められている。まずは「歌書伝受書」の書誌を記す。

日本大学総合学術情報センター蔵。請求記号：911.104/Ki.68。写本。楮紙袋綴。縦二十二・九糎×横十六・九糎。茶色地菊花唐草文様裂表紙。中央金紙題簽「教端抄　一（～八）」など。見返し、菊花唐草文様布目金紙。一面概ね八行書、一行十五～二十二字程度。朱で清濁点や振仮名を附すことがある。本文は吉保方の書写者によるものと推定されるが、吉保自身の筆ではない。なお、相伝奥書および『教端抄』の題簽は季吟自筆である。印記、「日本大学図書館蔵」（朱）。故佐藤運雄氏（元理事長）寄贈（昭31・2・11付）。以下、他の伝本との比較の際には、日大本と称する。

「歌書伝受書」は、『教端抄』[2]八冊（一～八）、『十如是和歌集』[3]一冊、『八代集口訣』[4]一冊、『新勅撰和歌集口実』[5]四冊（上一・上二・下一・下二）、『万葉集口訣』一冊、『詠歌大概拾穂抄』一冊、『源氏物語微意』三冊（上・中・下）からなる。それぞれ墨付丁数および遊紙は以下の通りである。

『教端抄』第一冊140丁・第二冊195丁・第三冊160丁・第四冊211丁・第五冊96丁・第六冊136丁・第七冊163丁・第八冊175丁（すべて遊紙前1丁、後2丁）
『十如是和歌集』24丁（遊紙前1丁、後2丁）
『八代集口訣』40丁（遊紙前1丁、後2丁）
『新勅撰和歌集口実』第一冊125丁・第二冊111丁・第三冊123丁・第四冊127丁（すべて遊紙前1丁、後2丁）
『万葉集口訣』23丁（遊紙前1丁、後2丁）
『詠歌大概拾穂抄』144丁（遊紙前1丁、後2丁）
『源氏物語微意』第一冊101丁（遊紙前1丁、後2丁）・第二冊104丁（遊紙前1丁、後2丁）・第三冊104丁（遊紙前1丁、後1丁）

なお、『八代集口訣』は「後撰和歌集口訣」（1ヶ条）、「拾遺和歌集口訣」（4ヶ条）、「後拾遺和歌集口訣」（2ヶ条）、「千載和歌集口訣」（4ヶ条）、「新古今和歌集口訣」（18ヶ条）、「新古今集口訣追加」（6ヶ条）からなり、その末には「枕草子春曙抄口訣」（10ヶ条）が記されている。

重要な事項として、柳沢文庫蔵『古今集并歌書品々御伝受御書付』[6]が収められている塗箱が、本資料の塗箱と同種であることがあげられる[7]。現在は別の機関に所蔵されているが、もとは揃いで季吟から吉保へ伝授され、柳沢家に伝えられていたものと考えられる。

二　書写の時期

本章では、季吟自筆による相伝奥書を確認し、書写の時期について考察する。なお、本稿末尾にその他の奥書を含めた奥書一覧を掲載した。

本稿末尾に掲載した季吟筆相伝奥書の年紀を整理すると、

元禄十五年（一七〇二）十月十四日
『八代集口訣』、『新勅撰和歌集口実』、『万葉集口訣』
元禄十五年十月吉祥日
『源氏物語微意』
元禄十五年十一月十八日
『教端抄』、『十如是和歌集』
年紀不明
『詠歌大概拾穂抄』

となり、少なくとも二種類の年紀が存在することとなる。以下、この問題について考察する。前述の『古今集并歌書品々御伝受御書付』の一部である「覚」に、書写の事情を窺わせる以下の記述がある。

覚

一　御本之教端抄〈八／冊〉任二御意一外題染二愚筆一返進仕候。并青紙御不審之所々、委細改返進仕候。其中ニ御不審難二心得一奉レ存候事、五・六所御座候者、其分ニ而指置申候。奥書仕候。

一　十如是之注本、是亦任二貴意一加二奥書一進上申候。

一　封之印別ニ包進上仕候。

吉保からの依頼で『教端抄』の題簽を書いたこと、吉保が青紙で不審箇所について尋ねたものに対して改めて返したこと、その不審箇所のうち季吟が理解しがたかった五・六箇所についてはそのままにしたこと、『教端抄』の奥書を記したことが知られる。また、『十如是和歌集』（「十如是之注本」）についても吉保の求めに応じて奥書を加えて送ったことが記される。この記述の通り、日大本『教端抄』の題簽は季吟自筆と認められる。なお、その他の「歌書伝受書」の題簽は本文と同筆である。青紙については現存しておらず、季吟の「委細改」が具体的に何を指すのかは詳らかでない。他の伝本との比較検討を要するため、この点については別稿に譲りたい。

さて、「覚」に『教端抄』と『十如是和歌集』の名が見えることにより、この両書の「元禄十五年十一月十八日」の相伝奥書と、『八代集口訣』などの「元禄十五年十月十四日」の相伝奥書とは、実際に記された時期が異なっていたと考えるべきであろう。この理由を考察するに当たって、まずは吉保への古今伝授に関する記事を整理しよう。[8]

吉保の公用日記である『楽只堂年録』[9]には、元禄十三年八月二十七日に「一、今日、再昌院法印季吟より、古今の秘訣を伝授す」とある。その後、元禄十五年四月六日に吉保邸の失火があり、同年七月十二日に「一、北村再昌院法印季吟を請して、再び古今和歌集の口訣を伝受す、去年伝受したれども、書籍焼亡するによりて也、時服三つ・重硯箱一通りを贈る」とあり、ここで再度の伝授が行われている。翌日には「一、北村再昌院法印季吟へ、鮮鯛壱折・樽代千疋を贈る」とある。

一方で、『古今集并歌書品々御伝受御書付』の「師伝之血脈二通」にはそれぞれ「元禄十三〈庚辰〉九月二十七日奉授之　再昌院法印」とあり、また、無窮会蔵『北村季任聞書』[10]にも「吉保〈元禄十三年九月二十七日／松平美濃守〉」とあり、古今伝授の公式な日付は元禄十三年九月二十七日であることが知られる。『楽只堂年録』の記事が伝授の開始を意味するかどうかは不明であるが、北村湖春の「誓戒文」の例を見るに、吉保は元禄十三年九月二十七日に切紙伝授を受け、おそらく同日に誓詞を提出したのであろう。

さらに、『古今集并歌書品々御伝受御書付』の「詠歌大概之口訣」には「元禄十五年七月十六日　再昌院法印」（他二葉には「元禄十五年七月吉祥日」）とある。[11]

以上のことを踏まえると、相伝奥書の「十月十四日」から

「十一月十八日」のほぼ一月のずれは、「覚」に記されるように、吉保が『教端抄』を読み込み、不審箇所について検討するための期間と考えられないだろうか。[12]

川上本『古今拾穂抄』には元禄十二年十二月二十九日に、『古今拾穂抄』を『教端抄』と改名して「五丸様」に献上した旨が記される。つまり、吉保への初度の古今伝授の際には既に『教端抄』は成立しており、吉保に伝えられていたものと考えられる。そして、日大本『教端抄』によれば、元禄十四年から翌十五年にかけて再度の書写を行ったことが記されており、川上本と比較するに本文の改訂が行われていることが知られる。そのため、再度の古今伝授の際に改めて不審を尋ねる機会が設けられたのではないだろうか。

また、『十如是和歌集』は奥書に「八半之小本」などと記すことから推すに、はじめは伝授書ではなかったのではないか。相伝奥書に「家伝」や「秘説」とないことも、その感を強くさせる。そのため、初度の古今伝授の際には伝えておらず、再度の古今伝授の際に吉保の要望により与えることになったのではないだろうか。

「元禄十五年十月十四日」の相伝奥書を有する書籍は、『教端抄』と異なり、初度の古今伝授が行われた元禄十三年以降の奥書（相伝奥書を除く）を有さない。既に授与したものから更改がないため、書写を終えた時点で即座に相伝奥書を加えたとすれば、年紀のずれはひとまず説明できよう。

なお、少々余談に流れるが、『北村季任聞書』によると、『教端抄』の献上に先立ち、元禄五年三月五日付で「五之丸様」、すなわち瑞春院[13]に古今伝授を行っている。この日は『寛政重修諸家譜』[14]に「（稿者注：元禄）五年三月五日仰により古今和歌集伝授の切紙を献じ、紅裏の呉服をたまはる」とあることにより、従来、季吟が綱吉に古今伝授を行った日と理解されてきたが、『北村季任聞書』の記述によれば、切紙を献じた対象は綱吉ではなく、その室の瑞春院であったことになる。[15]『北村季任聞書』に記される湖春や吉保への古今伝授の日付は、湖春の誓紙や吉保の『古今集并歌書品々御伝受御書付』と一致しており、資料の信憑性は高い。[16]また、川上本『古今拾穂抄』（『教端抄』）には元禄十二年十二月二十九日に瑞春院に九冊本の『教端抄』を献上した旨が記される。以上のことを踏まえると、季吟を江戸に呼び寄せた背景にも瑞春院の意思を考慮すべき可能性が生じる。今後、考究すべき重要な課題である。

三　『源氏物語微意』について

「歌書伝受書」と重複する部分もあるが、始めに書誌をあげよう。

日本大学総合学術情報センター蔵。請求記号：911.104/Ki.68/17～19。写本。楮紙袋綴。3冊。縦二十二・九糎×横十六・九糎。茶色地菊花唐草文様裂表紙、中央金紙題簽「源

氏物語微意　上（中・下）」。内題「源氏物語微意」（上巻）。見返し、菊花唐草文様布目金紙。墨付丁数、上巻101丁・中巻104丁・下巻104丁。一面概ね八行書、一行十五～十七字程度。印記、「日本大学図書館蔵」（朱）。下巻末尾に「源氏物語日本紀准拠」「源氏物語止観説」「てにをは少々」が記される。孤本である。

『源氏物語微意』（以下、『微意』と称する）について、野村氏は、

季吟の源氏研究の極意を卑近な譬喩を用いて云々するのは、冒瀆のそしりを免れぬではあろうが、『源氏物語微意』は濃厚な儒教的訓戒の染料を以て各巻々を色揚げしたようにみえる。さきに引用した『俳諧用意風躰』中の源氏観など、季吟ならずとも以前からいわれていることではあるが、それを各項に分けてそれぞれに応じて色揚げしているところに彼の工夫があり、従って秘伝たる所以が存在すると考えるのである。〔中略〕結局季吟の根底に『徒然草』が教訓書として最適であったように、より著名な『源氏物語』もそうでなければならず、またそのように読むのが正解だとの考えがあったためと思うのである。[17]

と、『微意』の花宴巻と花散里巻の各条を列挙し、『湖月抄』と比較の上で述べられた。[18] ただし、そこでは季吟の伝授観への言及に主眼が置かれ、『微意』そのものに関する言及は少ない。そこで、改めて成立や内容について検討していきたい。

四　成立時期について

『微意』については、成立時の一幕を物語る書簡が存在する。野村氏が紹介された「北村季吟書簡：北村正立宛」である。

（稿者注：元禄八年）五月十二日〔中略〕

一　内々所望之古今集、老筆雖二見苦候一、即染レ筆一校合申レ為指上候。湖春後撰も出来候故、一所ニ上候。源氏之微意三巻之内、上一巻清書出来候間、草案之本遣候。是者源氏熟読之上ニ見而、可レ為二家珍一候。殊講談之時、此所々ヲ読聞せ候ニハ深秘之故、多年之有増に候処、今度成就申候、必々よみ聞せ候而、写させ候事有間敷候。此方ニハ伝授之箱之内ニ納置候。跡々出来次第上せ可レ申候。[19]〔後略〕

『微意』三巻のうち、上巻の清書を終えたので草稿本を次男正立に送ること、清書本は季吟方の「伝授之箱」に納めておくことが記される。また、長年の企図がようやく成就したものであり、深秘であるため、講談の際には読み聞かせるだけで、決して写させないようにと指示している。

野村氏は当該書簡を元禄九年のものと推定されたが、元禄

八年のものと考えるべきであろう。『微意』下巻の奥書を以下に掲げよう。

元禄七年八月十五日向南月下染レ筆而同年十月廿五日北野影前終レ功畢　　法眼季吟

元禄八年六月三日重而清書レ之

源氏物語日本紀准拠

〔中略〕

元禄乙亥林鐘（稿者注：元禄八年六月）初六染レ筆レ於二近水亭一而欲レ伝二児孫一。不レ可レ有二外見一者也。

同十一日校合畢　　七松子

以下、季吟筆の相伝奥書が続く。野村氏は「元禄九年と推定したのは、『源氏物語微意』の成立が注13の識語（稿者注：前掲奥書傍線部）のごとく同八年六月と考えられるからである」[20]と述べられた。しかし、二重傍線部と波線部により、『微意』の「源氏物語日本紀准拠」以下を除く部分の成立は元禄七年十月二十五日であり、清書を終えたのが元禄八年六月三日であることが知られるのである。上巻の清書を元禄八年五月十二日に終えていたとして矛盾は無い。傍線部は「源氏物語日本紀准拠」「源氏物語止観説」「てにをは少々」を後に記したことを示すと捉えるべきであろう。

これまでの考察を踏まえ、『微意』に関する略年譜を記すと以下のようになる。『微意』奥書以外は根拠となる資料を文末に示す。

・元禄七年八月十五日、『微意』執筆開始。
・同年十月二十五日、『微意』（「源氏物語日本紀准拠」以下を除く）成立。
・元禄八年五月十二日、『微意』上巻の清書を終え、正立に草稿本を送る。（正立宛書簡）
・同年六月三日、『微意』全巻（「源氏物語日本紀准拠」以下を除く）の清書を終える。
・同年同月六日、「源氏物語日本紀准拠」以下を追加する。
・同年同月十一日、校合を終える。
・元禄十三年八月二十七日頃、吉保に伝授か。（『楽只堂年録』）
・元禄十五年十月某日（十四日か）、吉保に伝授する。

なお、奥書の成立時期に関する記述は、『微意』の序文の「みやづかえいそがはしきいとまにふんでをはしらしめ」たとする記述や、後述する注記35の元禄七年七月十四日に湖春とともに無縁寺に参詣したとする記述、あるいは注記中にしばしば『湖月抄』の名が見えることと矛盾せず、信ずべきものであろう。

五　執筆の意図について

前掲の『微意』の相伝奥書には「欲レ伝二児孫一」とあり、「正立宛書簡」には「可レ為二家珍一」とあり、『微意』の序文には、

やつがれ七そぢにあまるよはひまでに、八たびのかうぜちをとげて、人にとひ人にこたへつゝ、わづかにくうづきにたるしるしばかり、みやづかえいそがはしきいとまにふんでをはしらしめて、源氏物語の微意となづけて鐘愛の児孫にあたへむとならし。ふかき窓の中にひめをかしめて、ひろきよにさし出すべくもあらぬ物なれば、をろかにいやしきはゞかりをもしゐてかへりみおもふべきにあらずとなん。

と傍線部のごとくあり、いずれも児孫に伝えることを目的としている。注記にも、それを証する事例がある。賢木巻の注記73、桐壺帝崩御の場面である。

院の御なやみ神無月になりては
桐壺の帝此巻にて崩御也。うき世の生老病死は帝王ものがれましまさぬことはりを示す物也。但仙院などにて此物語を講ぜんにはこゝより「御位をさらせ給ふといふばかりこそあれ」といふまでをよみ侍まじくや。

傍線部では、仙院での講説の際に、桐壺院の崩御の場面を省略することを指示する。これはまさに歌学方を継いでいくであろう子孫に対するものと見なせよう。実際に省略が行われたかどうかは定かではないが、講説の実態を示唆する記述として興味深い。

ただし、全体を俯瞰すると、注記の多くは身の処し方に関する言及である。執筆の方針は桐壺巻冒頭に明らかである。

此巻にて光源氏生れ給へり。此君は桐壺の帝のみこにて容貌閑雅に文学のざえ高く和哥管絃の道もすぐれ給へれど、好色にすぎ給ひさま〴〵奇怪の御ふるまひ有て、終に朧月夜の尚侍の故に須磨のうれへなどおはしける事をかきてみる人のいましめとせり。
人として敬の一字を忘れては身のため家のためあぢきなかるべし。君子の管絃をたしなむは礼楽とて国家をおさむるもとなれば也。和哥の道も同く国の風俗を正し士の才をえらびて治国平天下のたすけなるべきを、かへりて相如が文君をいとみ（ママ）しがごとく哥道も花鳥の使ひとのみなりゆくは敬なきが故也。此物語は全篇此心ばせをさしはさみて見る事、紫式部の本意とかや。

「敬の一字を忘れ」ないようにとの戒めが「紫式部の本意」であると記し、実際にそれを全篇にわたって詳述していく。

たとえば、続く注記2では、

　此草子おもては好色妖艶のことわざをかきて、下には好色妖艶の人をそこなふことをいましめて、かみ一人よりしも万民までこゝに至て平生をあやまたざれとの微意あり。

と好色によって、人生を誤ることの無いようにとの戒めであるとする。『源氏物語』がむしろ好色を戒めているのだとする言説は珍しくないが、季吟の言及はそこにとどまらない。同じく桐壺巻の注記4、源氏の袴着の場面では、

　それにつけて世のそしりのみ

　適子衆子品あるべき事のいましめなるべし。父母として適子より弟を愛して、兄にひとしからしむるためしまゝ有て、鄭の荘公の弟大叔段、母武姜の寵にのりて都城百雉に過たるも終にみだれのもとなりし。孤竹の君の二子のたがひにゆづりしたぐひ、我朝にも宇治のみこのごとき人はよにまれなるべきわざなれば父母たる人の心すべき所なるべし。

と、父母は兄弟の序列を違えるべきでないと説き、葵巻の注記62、車争いの場面では、

　わかきものどもゑひ過立さはぎたるほどの事はえしたゝめあへず

　下部に酒のまする事は心すること、昔も今も大切のいましめ也。〔中略〕夏の禹王の旨酒をうとみ給ひしをはじめ、乱に及ぼさぬ孔子の御こと、まして飲酒の戒め、後の世までもいとおそろし。紫式部の微意浅からぬわざ也。

と飲酒の戒めについて説く。全体として教訓色が強く、教戒の対象は君臣、老若男女におよぶことには留意が必要であろう。とりわけて特定の人物にあてて記されたものではないと認められる。

六　『湖月抄』とのかかわり

『八代集抄』と『八代集口訣』、『万葉拾穂抄』と『万葉集口訣』の場合は、板本に「口訣有」などと記され、口訣と対応することが知られている。[2] 一方、『湖月抄』と『微意』には、成立時期に懸隔があることもあり、そのような対応関係は見られない。では、どのような関係にあるのか。以下、『湖月抄』と『微意』との関係性が窺える注記について検討したい。

若紫巻の注記35では、以下の通り、『細流抄』の説に言及する。

こんがうじのずゞの玉のさうぞくしたる
細〈流〉云、或人法隆寺に太子の念珠一連あり。彼寺の縁起にもみえたり〈云／々〉。花鳥餘情には聖徳太子の数珠の事いまだみ出し侍らずとの給へり。
元禄七年七月十四日、法隆寺の古物を江戸にもて来て無縁寺にて見せたりしを、湖春と丶もにおがみにまうで侍るに金剛子のずゞ有て金銀瑠璃等の玉のさうろく（ママ）したり。即縁起にもあるよし堂僧かたりし。細流の説、無レ疑物なるべし。

しかし、「細流云」とされる「太子の念珠」の注記は、実際には『河海抄』を出所とする記事であって、『細流抄』や『明星抄』には見えず、他の注釈書においてもこの注記を『細流抄』のものとすることはない。なぜこのような誤認が生じたかについては、『湖月抄』の注記を参照すると明らかになる。『湖月抄』には、若紫巻の頭注「聖徳太子のくだらより」に、

〈細〉僧都引出物申さる丶也。
〈河〉本朝神仙伝を引て欽明天皇ノ御宇ニ聖徳太子六歳冬十月ニ自二百済国一経論律師禅師比丘尼以下を始て種々の宝を奉る〈云／々〉。但[22]太子金剛子ノ念珠ハ書伝以下ニ無二所見一〈云／々〉。
或人云法隆寺ニ太子ノ念珠一連あり。又彼寺の縁起にも見えたり〈云／々〉。〈花〉百済国より金剛子のわたりたる事は〔中略〕〈云／々〉。但聖徳太子の数珠の事はいまだ見出し侍らず。さもありぬべくよりきたる事をばつくり事にいひなす常ノ事也[23]。」20丁ウ

（20丁オ～ウ。改行を忠実に行った。）

とあり、『細流抄』『河海抄』『花鳥余情』の順に記事が並べられている。この箇所の「河」の肩付を見落としたために、本来『河海抄』の記事である「太子の念珠」の注記を、『細流抄』の記事と誤認してしまったのだと考えられる[24]。

この事象は、季吟が伝授書である『微意』を執筆する際に、板本『湖月抄』を参照していたことを意味する。仮に板本そのものでなく手控本などを参照していたとしても、参照した本と板本『湖月抄』とが、記事の並び順など、極めて近しい関係にあったことは疑いない。

また、初音巻冒頭の注記197には、

泯江入楚に或説云、玉かづらの巻の末十二月にきぬくばりとて有し其明る正月也。二条六条院すみ分てさらためたる正月也〈云／々〉。此説花鳥等の諸抄の様にかはりて此巻を源氏君卅五歳といふに相かなへり。尤用ゆべし。猶湖月抄に委。

（『微意』中巻）

とあり、『湖月抄』の対応箇所には、

〈花〉源氏卅六歳の正月の事をかけり。并の事、玉鬘の巻ノ翌年の事なれば竪の并也。〈孟同〉〈細〉竪の并也。行幸ノ巻まで月次に書て行也。〈愚按〉抄に、玉鬘ノ巻のすゑ、十二月にきぬくばりとてありし、其あくる正月なり。二条六条ノ院住わきてさらためたる正月也といへる説あり。是彼一説の義に同じ。いづれの御説とは分明ならねど、此説は此巻源氏卅五歳と云なるべし。

（初音巻、1丁オ）

とある。なお、『湖月抄』点線部「彼一説」は玉鬘巻冒頭に記される。そこでは年立の記述に、「愚案」として1丁ほどの分量を費やしており、この注記についての季吟の思い入れの深さが窺える。

『微意』の傍線部に「猶湖月抄に委」とあるように、『湖月抄』に記したことについては詳述を避けている。この箇所以外にも『湖月抄』に記したことを省略する注記はしばしば現れる。当該箇所は季吟説に関わる事であるが、他書からの引用の場合も同様である。

このことは、季吟が執筆時に『湖月抄』を参照していたことに加え、『微意』を読む際には『湖月抄』を手元に置くことを想定しているものと考えられよう。

また、前述の注記197の波線部に『岷江入楚』の名が見えることには注意を要しよう。『微意』には『岷江入楚』の「或説」とあるのに対して、『湖月抄』では波線部のように「抄」となっていた。『湖月抄』における『岷江入楚』利用については、松本大氏の論考[25]が備わる。松本氏は注記の比較によって論証されているが、『微意』の当該注記によって、季吟の『岷江入楚』利用が資料面からも証されることとなる。当該注記以外にもたとえば以下の注記に『岷江入楚』の名が見える。

位なき人はとてむもんの御なをし
公儀を恐給ふ礼儀なるべし。此巻仁義五常朋友の中ひ迄いへりと泯江入楚にも云る可レ付レ心也。称名院源氏物語を盛者必衰の心にて見よと也と孟津抄にいへるさる事にや。

（『微意』上巻、須磨巻、注記93）

かうくちおしきにごりのすゑに
濁悪世にさばかりすゝぎ給ふほどすむべき水は有がた

からんとなり。一たび夕霧ゆへにけがれ給へる雲ゐの雁の名はきよめがたからんと也。湖月抄には岷江入楚の儀を用ゆ。所好にしたがふべし。

（『微意』中巻、行幸巻、注記243）

稿者はかつて板本『春曙抄』の修訂で『円機活法』の名が抹消される事例を指摘したことがある。[26] その一方で、天理本『理木』に合綴される「誹諧会法」の「追考」には、『円機活法』の名が明示されることも指摘した。その事例と同様に、板本『湖月抄』中には「抄」などとのみ記す『岷江入楚』について、伝授書『微意』中にはその名を記している。これらのことは、板本では全てを明らかにしなかった手の内を、伝授書においてはこだわりなく見せていることを示しているといえよう。板本と伝授書での季吟の態度の差が窺える好例である。

なお、『微意』には、「私案」「予案」として説を述べる箇所がある。それは以下のように他書からの引用の後に自説を述べる場合に限られ、自他の説を区別するための処置である。

もてしづめすくよかなるうはべばかり

細流云、人は実法ばかりにても叶ぬ物也。花実を相兼ずしてはと也。〈私案〉是夕霧をほめ給ふ詞也。人の教也。

（『微意』中巻、初音巻、注記201）

七　『源氏物語微意』という書名

最後に、書名にも用いられ、注記にもたびたび見える「微意」の語義について一言しておきたい。「微意」はたとえば『大漢和辞典』には、「（一）いささかの意。己の志の謙称。微志。微衷。〔中略〕（二）おく深い心。微妙の心」[27]とある。前者は山東京伝『青楼昼之世界錦之裏』附言の、

予屡妄の著述をなし、淫蕩を伝ふるに似たれども、必其戒を忘れず、喜怒哀楽の人情を述て、勧善懲悪の微意あり。[28]

を、後者は伊藤仁斎『童子問』の、

註家聖人微意の在る所を知ず、乃前章に於ては之を解して曰、『礼は中を得ることを貴ぶ。奢るときは則過ぐ。倹なるときは則及ず。二の者皆礼に合はず』と。又後章を解して曰、『奢倹倶に中を失す。已むことを得ずして時の幣を救ふなり』と。[29]　（巻の下、第二十六章）

を参考として挙げておこう。前述の注記62には「紫式部の微意浅からぬわざ也」とあった。ここでは「紫式部の」とあるからには前者の意ではあり得ない。また、その他の箇所でも

季吟が「微意」の主体となることはない。では後者かというと「浅からぬ」とある点が問題となる。他の注記でも、若紫巻の注記36、

とよらのてらのにしなるや
弁の君此哥をうたふに鞍馬寺のよしあるのみにあらず、深き微意あり。

の傍線部のように、「微意」には深浅があり得ることが記される。従って「おく深い心」と理解することには慎重であるべきである。また、特徴的な用例として、

人のくになどに侍る海山の有さま
すま明石の巻かくべき微意也
（『微意』上巻、若紫巻、注記34）

つゝましきことなからん見付てしがな
〔中略〕さて末摘花の君を書出んとての微意也。
（『微意』上巻、末摘花巻、注記39）

色々の願はたし申べきよし御使して
水尾尽巻住吉詣有べき微意也。
（『微意』上巻、明石巻、注記103）

などのように、「書くべき」「微意」、「有べき」「微意」と、現在の「伏線」に近い意味で用いられているものが存在する。

これらのことを踏まえ、本文の用例を閲するに、本文中の「微意」は「隠れた意図」の意で用いられていると見るべきではないだろうか。「微」は「隠す」の義を有する。

しかし、一方で書名の『微意』の「微意」の語義については、別に一考の余地があるだろう。書名に謙辞を用いることは一般的であり、謙辞でもあり得る「微意」に季吟がその意を含めなかったとは断じえない。書名に限っては、「源氏物語における（紫式部の）隠れた意図」と「源氏物語についての（季吟の）微かな意志」（謙辞）の両義を認めることも可能であろう。

終わりに

以上、本稿では「歌書伝受書」および『源氏物語微意』の基礎的研究を行った。

『微意』は『湖月抄』に比して先行諸注からの引用が少なく、季吟の源氏物語理解を察知するに格好の資料である。従来、季吟の学問については板本の記述をもって諸注集成の側面が強調されてきた。そのような理解についても再考を迫る資料といえよう。

次稿では、季吟周辺の『源氏物語』関連書について、写本類を中心に、個別具体的な調査報告と考察を行うこととする。

注

（1）「歌書伝受書」全体に触れる研究として、野村貴次『北村季吟の人と仕事』（新典社、昭52・11）、同『北村季吟古注釈集成解説　季吟本への道のり』（新典社、昭58・3、北村季吟古註釈集成別1）が挙げられる。前者の「第三章　人と仕事」、後者の「第四章　継ぐべかりし人正立」に特に詳しい。

また、影印・解題は以下の資料に掲載されている。塗箱は前者で確認できる。

・日本大学総合学術情報センター所蔵古典籍・貴重書資料展覧会実施プロジェクト編『日本大学総合学術情報センター所蔵貴重書展　書物が伝える日本の美――書写と印刷文化――』（日本大学総合学術情報センター、平13・10）。

・古典籍資料目録編集委員会編『日本大学総合学術情報センター所蔵　古典籍資料目録5――歌書編（三）――』（日本大学総合学術情報センター、平20・3）。

なお、塗箱は仕切板で左右に区切られている。寸法は蓋が縦三七・八糎×横二六・二糎×高さ一五・〇糎、箱（内部）が縦二三・八糎×横一七・四糎×深さ一五・四糎であり、台座の高さが三・五糎である。

（2）『教端抄』は、片桐洋一編『教端抄：初雁文庫本古今和歌集』（新典社、昭54・11）に初雁文庫本の影印と片桐洋一氏の「解説」が、『古今拾穂抄』（勉誠出版、平20・11、古今集注釈書影印叢刊）に川上新一郎氏蔵本の影印と川上新一郎氏の「解説」が備わる。川上新一郎「北村季吟『古今拾穂抄』について――教端抄の成立――」『斯道文庫論集』（第41輯、平19・2）も参照されたい。また、島内景二「第Ⅱ章　六義園の心とは」『柳沢吉保と江戸の夢』（笠間書院、平21・8）にも日大本『教端抄』への言及がある。

以下に、日大本『教端抄』第七冊末尾に記される跋文を翻刻する。これは他の伝本には見えない記述である。

逍遊軒貞徳老人は源氏物語を東光院殿（九条殿稙通公）に承りて孟津抄を書写して奥書をも申給はり細川玄旨法印に哥の引直しをかうふり詠歌大概百人一首伊勢物語をも購読の席につらなり古今和歌集の清濁をも伝授仕りし人なれは其門人にくはゝりて詠歌大概は伊勢小町等の類なりといへる所の切紙をも伝はれり百人一首は五哥の秘訣伊勢物語は七ヶの大事まて問聞　源氏の三ヶの大事も彼家の止観の説を伝授せし古今和歌集は清濁句読はこまやかに伝え蓮心院聞書栄雅抄なとまて伝へなから年齢いまた〈廿九歳〉四十歳に及はすとて三鳥三ヶ大事等はゆるされぬほとに八十六歳にてうせ侍りき霊瑞院権大僧都法印〈従高或号暫酔〉は東泰院大僧正〈光従〉の第二子なるに父君より和泉の堺のくえんかう寺祐心坊か牡丹花老人の古今伝授を授けたりしを受伝はり七条道場の一華堂切臨に二条家流（ママ）議の諸家の説を聞冷泉家の儀をも伺ひ其抄物数巻をうつしとり貞徳老人にも親煮（ママ）して江別長浜の大通寺を隠居のゝち高倉の六角浅井氏の家にやとりて和歌誹諧を友にてあかしくらし給へりしにやつかれ二日閑話のつゐてに彼貞徳に伝えのこせしほとに老人に別侍し歎きを愁申せしかはいたくな侘そ我伝てんとの給ひて祇注一華抄其外諸家の抄物まて誰にか見せて伝ふへきとてのこらす授け血脈相承までにまことに浅からぬ情千尋にも限るへからす其故に教端抄に師説とて書つる事ともに貞徳口授の所もありおほくは此従高法印の説なりけり此法印水無瀬大納言に近きゆかり也万里小路大納言いもうとの

故にいとしたしかりし二条太閤〈康通公誹諧名千丸〉叔父（に）おはしませは折々和哥誹諧連歌の会なと有し氷場の音羽川の辺に幽居の後はかやうの人々にもさして交はらす平生からやまとのふみをかたはらさらぬものとし給ひて只やつかれをまつはしかたらひ給ひつる身の終りちかく覚え給ひし果にはひんかしの六条土手町といふ所にかくれかして仏のみなを事として年比の詠草三四冊有しをもかの浄弁か焼捨にける心高さをこひねかひてはふられなんひつきの中に随身せんと遺言してつゐに其ほいのことくとりをこなひ侍し適物のはしにかき給ひつるうたよみかはせし詠草なとの残りとゝまれるか五六七首侍るをみるに今の世のさかりにこのみよむ人々の及はぬ所になん有けるおしむへし〳〵いかに透逸（ママ）のあまた侍けん其好める風体心はへは此抄の所々に古哥を注釈し給へる詞の末にてをしはかるへし流俗のたくひには侍らさるへし

この跋文は多くの情報を含むが、ここでは以下の三点を指摘しておきたい。

一点目は、季吟は貞徳から『源氏物語』の「三ヶの大事」を伝授されていたということである。『湖月抄』「凡例」に「此物語の口伝等再聞し侍し」とある「口伝等」は、具体的には「三ヶの大事」を含むことが判明する。

二点目は、『教端抄』に記す「師説」の多くは従高の説であるということである。片桐氏は前掲「解説」で、「季吟が最も重んじ、みずからの解釈を支える大きな柱にしたのは〔中略〕宗祇説と、「貞徳云……」とか「師云……」という形で引かれていた松永貞徳の説」と述べられるが、「師説」は多く従高の説であるため、再考の余地がある。

三点目は、季吟が古今伝授は四十歳まで許されないと理解していたということである。榎坂浩尚氏は「湖春研究」『北村季吟論考』（新典社、平8・6）で、

湖春が古今伝授を父から受けたのは、

古今和歌集伝授一十之式目令違背者左之誓文之罰歴前可罷蒙者也敬白誓戒文梵天帝釈四大天王惣而日本国中六十余州大小神祇別而住吉玉津鳴両所大明神天満神等神罰冥罰深厚可罷蒙者也

貞享〈丁／卯〉歳四月十八日　　北村湖春

北村季吟様

とある通り、これは江戸に召される二年前のことである。季吟の子息として、歌学により強い志向をもっておれば、もっと早く古今伝授を受けていた筈である　（97頁）

と述べ、「湖春には、季吟ほどの歌学への執心は見られ」（84頁）ないことの証左とされた。しかし、湖春の生年は慶安元年（一六四八）が有力と考えられ、貞享四年（一六八七）には四十歳である。湖春が四十歳になるや否や、古今伝授を行っているのであり、むしろ歌学への志は強かったと考えられ、ことは全く逆転するのである。

（3）辻勝美・那須陽一郎「日本大学所蔵『十如是和歌集』について――翻刻紹介・付初句索引――」（『語文』（日本大学）、第123輯、平17・12）に『十如是和歌集』の翻刻・解題が備わる。

（4）山岸徳平編『八代集全註　第一・二巻』（有精堂出版、昭35・7）に「枕草子春曙抄口訣」を除いた『八代集口訣』の翻刻と山岸氏の解説が、新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成　近

世旧注編3』（笠間書院、平12・2）に「新古今和歌集口訣」「新古今集口訣追加」の翻刻と青木賢豪氏の解題が、野村貴次『北村季吟の人と仕事』（444～447頁）に「枕草子春曙抄口訣」の翻刻が備わる。

（5）『新勅撰和歌集口実』については、野村貴次「第三章　人と仕事　第二節　献上と『新勅撰和歌集口実』」『北村季吟の人と仕事』に詳しい。また、関連する論考として、那須陽一郎「『訳和和歌集』享受の様相――『新勅撰和歌集口実』を中心として――」『日本大学大学院国文学専攻論集』第2号、平17・9）がある。

（6）所蔵番号：〇一―一四。原本閲覧停止中のため、実物は未見。宮川葉子『柳澤家の古典学（下）―文芸の諸相と環境―』（青簡舎、平24・2）に翻刻・解題が備わる。以下、切紙の呼称は宮川氏に従う。また、国文学研究資料館がマイクロフィルム（マイクロ請求記号：350-1-8-E）を所蔵している。

（7）『古今集并歌書品々御伝受御書付』の塗箱は以下の図録や柳沢文庫の図録で確認できる。

・滋賀県立琵琶湖文化館編『特別展　北村季吟』（昭53・5、近江先覚者シリーズ⑥）、（白黒）

・銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）編『町制四十周年記念特別展図録　北村季吟――俳諧・和歌・古典の師――』（平7・10）、（白黒、37頁）

・野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）編『野洲市誕生記念企画展図録　北村季吟――没後三〇〇年記念展――』（平17・4）、（口絵・カラー、(7)頁、白黒、31頁）

また、『楽只堂年録　第三』（八木書店、平26・6、史料纂集古記録編）の口絵にもカラー写真が掲載されている。

（8）季吟周辺の古今伝授については、日下幸男『近世古今伝授史の研究　地下篇』（新典社、平10・10）に詳しい。

（9）以下、『楽只堂年録』の引用は、『楽只堂年録　第三』（八木書店、平26・6、史料纂集古記録編）に拠る。

（10）平沼文庫、請求記号：二一〇五九。写本。列帖装。横本。縦一〇・〇糎×横一九・五糎。墨付丁数12丁。8丁オに、季吟から朱線を引き、以下の人々に伝授したことが示される。

湖春〈貞享四年四月十八日〉
正立〈元禄二年十二月十九日〉
（稿者注：「二年」以降を一度消しているか。）
五之丸様〈元禄五年三月五日〉（稿者注：一字台頭）
吉保〈元禄十三年九月二十七日／松平美濃守〉
直重〈元禄十四年九月五日／黒田豊前守〉
（稿者注：黒田直邦のこと。）
湖元〈宝永元年四月六日〉
季任〈同年同月同日〉

また、直前に『古今集并歌書品々御伝受御書付』の「師伝之血脈二通」と同様の血脈も記されている。その貞徳の項目に「貞徳ハ非直伝／箱伝受也」とあることは「師伝之血脈二通」との大きな差違といえよう。「師伝之血脈二通」には同様の記述はない。「師伝之血脈二通」の「女説口伝」の裏書に「世上ニ箱伝授ニモ血脈ナケレハ真実之古今伝受トハ云ヘカラスト師伝也」とあることを併せ考えると、季吟の配慮を読み取ることも出来よう。

なお、正立の項については、本資料の5丁ウに「三鳥之口伝」の奥書として、「右以師伝之趣授与正立生者也。明十日東行／之節依無寸隙而使正立生書写以加奥書／而已／元禄二年十二月九日

北村季吟〈朱印〉」とある通り、元禄二年十二月九日に伝えられたとみられる。文字を消した跡があり、意図は不明であるが、何者かによる修正が加えられたものとみるべきである。

さらに、黒田直邦への古今伝授が元禄十四年九月五日に行われたことが本資料によって知られる。『楽只堂年録』によると、吉保は元禄十三年八月十五日に「詩歌の会」（季吟・北村湖元、参会）、元禄十四年同月同日にも「詩歌の会」（季吟・正立・湖元、参会）、元禄十五年同月同日には「和歌の会」（季吟・湖元、参会）を開催している。吉保は元禄十二年以前の同月同日には詩歌に関わる会を開催しておらず、「詩歌（和歌）の会」の開催は吉保への古今伝授が元禄十三年九月二十七日に行われたことと軌を一にしている。黒田直邦は古今伝授を受けた後の元禄十五年の「和歌の会」で初めて参会しており、これもまた古今伝授と無縁ではあるまい。なお、正立は元禄十五年八月二十一日に没した。

『北村季任聞書』の詳細については、他にも季吟研究上、重要な記述があるため、別稿を期したい。

(11) 宮川葉子氏は『楽只堂年録』の記事と併せ、「七月十二日に、吉保は季吟から新たに四箇条の切紙講釈を受け、季吟の切紙を借りて書写、十六日に季吟の認証を得た」（注（6）掲出書、90頁）と推定する。

(12) 冊数の面から見ると、十月の年紀を有するものが9冊、十一月のものが9冊、不明1冊となり、冊数はほぼ半分ずつに分かれるが、墨付丁数では十月分が八五八丁、十一月分が一三〇〇丁であり、その差は大きい。また、再度の古今伝授の記事が『楽只堂年録』の七月十二日条にあることにより、そこから起算すると十月分はおよそ3ヶ月で9冊（八五八丁）、後者は1ヶ月で9冊（一三〇〇丁）の書写を行ったことになり、不自然である。別に要因を求めるべきであろう。

(13) 「五之丸様」（五丸様）が瑞春院（お伝の方）であることは、川上氏が注（2）掲出書「解説」で指摘している。『楽只堂年録』にも「五之丸様」と記される。

(14) 林述斎『新訂寛政重修諸家譜　第18』（続群書類従完成会、昭40・12）、巻第千二百十八。

(15) 注（10）の通り、綱吉の名は見えない。従来、綱吉の記録である『常憲院殿御実紀』に古今伝授の記事がないことが指摘されているが、綱吉に古今伝授を行っていないとすると、この問題は解決する。

(16) 他にも、本書冒頭の「古今和歌集伝受制法」が、従高自筆とみられる無窮会蔵『古今和歌集伝受制法』（平沼文庫　請求記号：一〇七五四）と一致することや、本書に記される「誓戒文」が湖春の「誓戒文」の文章と一致することによっても、本書の信頼性の高さが窺える。

(17) 野村貴次『北村季吟の人と仕事』「第三章　人と仕事　第一節　伝授と『源氏物語微意』」、初出「季吟の傳授観――晩年の歌書一二による試論――」（『国語と国文学』、昭49・10）。

(18) 他に、野村貴次『北村季吟古注釈集成解説　季吟本への道のり』「第四章　継ぐべかりし人正立、Ⅰ　川越少将と正立翁」においても、若干触れられる。

(19) 早稲田大学図書館蔵、請求記号：チ06 03890 0029 0002。

(20) 野村貴次『北村季吟の人と仕事』、456頁。

(21) 『八代集抄』については山岸徳平編『八代集全註　第一・二巻』「解説」に、『万葉拾穂抄』については野村貴次『北村季吟の人と

仕事』「第二章　仕事　第四節『万葉拾穂抄』」に指摘がある。ただし、野村氏の指摘は日大本を用いてのものではない。

(22) 欠損のため、人偏のみ見える。『河海抄』により補う。

(23) 『湖月抄』の引用に際しては、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7～53・7、北村季吟古註釈集成7～17）を用いた。同書の底本は早印本ではあるが、一部に野村氏の操作が加わるため、他の伝本も適宜参照し、異同のないことを確認している。

(24) 『岷江入楚』の「僧都引出物を申さる、也」の注記は、「秘」の肩付で項目の末尾にあるため、『岷江入楚』での「河」の肩付の脱落等は想定する必要がない。

(25) 松本大「『湖月抄』の注記編集方法――『岷江入楚』利用と『河海抄』引用について――」（『詞林』第54号、平25・10）。

(26) 拙稿「『枕草子春曙抄』における類書の利用とその隠匿――『円機活法』『事文類聚』を中心に――」（『詞林』第51号、平24・4）。

(27) 諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、昭32・3。修訂第二版、平元・7）、巻四、911頁。

(28) 寛政三年（一七九一）刊。『洒落本大成　第十六巻』（中央公論社、昭57・5）。

(29) 宝永四年刊。当該章は元禄六年成立とみられる。『近世思想家文集』（岩波書店、昭41・6、日本古典文学大系97）。

※引用に際して、割書・小書・肩付は〈〉で、改行は／で示した。字体は通行のものに改め、濁点や句読点、訓点を適宜附した。『源氏物語微意』の注記は翻刻の通し番号で所在を示した。

『古今集并歌書品々御伝受之書』奥書一覧

【凡例】

一、底本の翻刻に際しては、可能な限り原文のままとすることを原則とし、改行・清濁・誤字・脱字などに操作を加えることはしていない。ただし、字体は適宜通行のものに改めた。

一、丁移りの際には、行末に「」X丁オ（もしくはウ）」と、丁数と丁の表裏を示した。

一、その他、備考を「()」で、書写者を【】で示した。

【翻刻】

『教端抄』第一冊　巻末

第一巻奥書

元禄六年正月廿二日始述作之三月六日書畢　湖春

」140丁オ

第二巻奥

元禄六年四月二日書畢　湖春

元禄十年九月五日染筆而霜月十五終此一巻　季吟

元禄十四年辛巳二月社日書向南亭梅花下　再昌院法印

」140丁ウ

【以上、書写者筆】

『教端抄』第八冊　141丁オ　仮名序末尾

元禄十四〈辛巳〉年十二月廿七日寒梅映雪閑窓下書之〈墨付七十一枚〉

」141丁オ

【以上、書写者筆】

『教端抄』第八冊　巻末

元禄十五年〈壬午〉正月上元日終書写之功今日故湖春忌月也

再昌院法印季吟七十九歳　朱印有

」175丁オ

【以上、書写者筆】

古今教端抄者雖家伝之奥秘而子孫之外堅固不免他見今也川越少将殿此道之数奇深切以懇望不浅不堪其厚志之感而終応其需者也仍加奥書畢

元禄十五年十一月十八日　再昌院法印（朱丸印・七松）

」175丁ウ

【以上、季吟筆】

『十如是和歌集』巻末

元禄元年十月五日依冷泉中将〈為綱朝臣〉御所望抄出于新玉津嶋菊籬下畢　仙洞御月次

和歌冷泉中将出題即此十首之題也依之
令考之去三日被仰渡於今出河之亭者
也〈彼本陸奥紙小本〉　北村季吟　」24丁オ

（半行空）
元禄二年正月十五日依清水谷黄門〈実葉卿〉
御所望之旨重馳禿筆於新玉津嶋之梅花
下聊有前後損益者也〈此本蝋地鳥子八半之小本〉
同年閏正月六日　七松処士
【以上、書写者筆】

（半行空）
依川越少将殿御懇望奉免書写矣
元禄十五年十一月十八日　再昌院法印（朱丸印・七松）
」24丁ウ
【以上、季吟筆】

『八代集口訣』30丁ウ
（新古今和歌集口訣の後、新古今集口訣追加の前）
右八色抄之内註口訣之処々為後学好事者
筆之畢不可有外見耳
元禄十年閏二月時正日　北村法眼季吟　」30丁ウ
【以上、書写者筆】

『八代集口訣』巻末
雖私家之深秘依懇情不浅
而不堪感心奉免御書写矣
元禄十五年陽月十四日法印季吟（朱丸印・七松）
河越少将殿　」40丁ウ
【以上、季吟筆】

『新勅撰和歌集口実』第四冊　巻末
新勅撰集者京極中納言之和歌骨髄実
二条家之正風体而此道之学者不可有不
知不可有常不握翫者也固茲不顧浅才
之不堪老眼〈之〉不明以妄加註解染禿毫而
遺子孫之教矣今也奉感御執学不斜
以免御書写而已
元禄十五年陽月十四日　再昌院法印〈七十八歳〉（朱方
印・向南）
河越少将殿　」127丁ウ
【以上、季吟筆】

『万葉集口訣』20丁オ
（秘訣の後、「定家卿玄旨……〔桐火桶に関する言及〕」の前）
右二十一ヶ条万葉拾穂抄之秘訣也為伝執学
之人別所令抄出也此内久米之若子弱女之惑玉

勝間者可為此抄三箇乃大事而已
貞享四年正月十三日書新玉津島月下　季吟　」20丁オ
【以上、書写者筆】

『万葉集口訣』巻末
貞享四〈卯〉年上元日　新玉津島寓居士
【以上、書写者筆】

（一行空）
不堪厚志奉感不浅而不残深秘者也
元禄十五年十月十四日　再昌院法印（朱方印・向南）
川越少将殿　」23丁ウ
【以上、季吟筆】

『詠歌大概拾穂抄』巻末
右詠哥大概拾穂抄以相伝之師説所註也
不軽有漏脱歟
貞享二年臘月六日染筆於新玉津島庵下
季吟
【以上、書写者筆】

（一行空）
不残師伝之秘説奉授与河越少将殿畢
法印季吟（朱丸印・七松）」144丁ウ
【以上、季吟筆】

『源氏物語微意』第三冊　90丁ウ～91丁オ
（夢浮橋の後、「源氏物語日本紀准拠」の前）
元禄七年八月十五日向南月下染筆而
同年十月廿五日北野影前終功畢
法眼季吟　」90丁ウ
元禄八年六月三日重而清書之　」91丁オ
【以上、書写者筆】

『源氏物語微意』第三冊　巻末
元禄乙亥林鐘初六染筆於近水亭而欲
伝児孫不可有外見者也
（一行空）
同十一日校合畢　七松子
【以上、書写者筆】
雖私家伝不出窓外依御執学
不浅奉免御書写者也
元禄十五年小春吉祥日　季吟法印（朱方印・向南）
川越少将殿　」104丁オ
【以上、季吟筆】

日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意　上』翻刻

【凡例】

一、底本には日本大学総合学術情報センター蔵、北村季吟『源氏物語微意　上』（請求記号：911.104/Ki.68/17）を用いた。

一、底本の翻刻に際しては、可能な限り原文のままとすることを原則とし、改行・清濁・誤字・脱字などに操作を加えることはしていない。ただし、字体は適宜通行のものに改め、意の通じない箇所には「（ママ）」と傍記した。

一、丁移りの際には、行末に「」X丁オ（もしくはウ）」と、丁数と丁の表裏を示した。

一、『源氏物語』の巻が変わる箇所には、行頭に丸括弧囲み数字で巻次を示した。巻名が注記同様、一字下げで記されており、注記に紛れ易いための処置である。また、注記ごとに通し番号を付し、行頭に示した。これらの番号は上・中・下巻を通して用いる。

一、その他、備考を「〇」で示した。

【翻刻】

（遊紙1丁）

光源氏物語はむらさきの色こ
のみなる女手のあとなからこと
は美をつくしこゝろ善つくして
わかやまとみことうたの道の人々
これをみさらんことをはちおも
へりたゝ此道のたつきとする
のみにあらすやすみしる君とひと」1丁オ
との心しらひたらちねのおやと
子のむつましみいもせの山のたゝ
すまひ友ふねの行かふ道を教
ゆるゆへよしもいと浅からすすへ
てこゝのへの大宮所に今もむかし
のひしりの御代のならはし猶のこ
りてえんにうるはしきみやひ
あるも此物かたりの世にとゝまり
てもてはやさるゝゆへとかやさ」1丁ウ
れは此国の至宝これにすき
たる物あらしとそ桃花のさか
りなるふみのはしにもしるしお
はしましき其いたれるくまを
きはめんことは石山のきれはいよ
いよかたくあふけはいよ〳〵たか
き所なからやつかれ七そちに
あまるよはひまてに八たひのかう」2丁オ
せちをとけて人にとひ人にこたへ

つゝわつかにくうつきにたるしるし
はかりみやつかへいそかはしきいと
まにふんてをはしらしめて源
氏物語の微意となつけて鐘愛
の児孫にあたへむとならしふかき
窓の中にひめをかしめてひろき
よにさし出すへくもあらぬ物なれは
をろかにいやしきはゝかりをもしゐ
てかへりみおもふへきにあらすと
なん

（白紙）

源氏物語微意

（1）　桐壺

1此巻にて光源氏生れ給へり此君は
桐壺の帝のみこにて容貌閑雅
に文学のさえ高く和哥管絃の
道もすくれ給へれと好色にすき給
ひさま〳〵奇怪の御ふるまひ有て
終に朧月夜の尚侍の故に須磨の
うれへなとおはしける事をかきて
みる人のいましめとせり人として
敬の一字を忘れては身のため家の
ためあちきなかるへし君子の管絃
をたしなむは礼楽とて国家をおさ
むるもとなれは也和哥の道も同く
国の風俗を正し士の才をえらひて
治国平天下のたすけなるへきをか
へりて相如か文君をいとみ（ママ）しかこと
く哥道も花鳥の使ひとのみなり
ゆくは敬なきか故也此物語は全篇
此心はせをさしはさみて見る事
紫式部の本意とかや

2やう〳〵あめのしたにもあちきなう
此草子おもては好色妖艶のこと
わさをかきて下には好色妖艶の人
をそこなふことをいましめてかみ
一人よりしも万民まてこゝに至て
平生をあやまたされとの微意
あり桐壺の帝さしも賢王
なりしたに好色にまよはせ給ひ
ては人のそしりをもえ憚らせ給は
す上達部殿上人の目にふれあ
まねく天下の歎きとなりて
五十年太平の天子なりし唐帝
も蜀にみゆきの難にあはせ給へ
りつる楊貴妃のためしもひき出

」2丁ウ
」3丁オ
」3丁ウ
」4丁オ
」4丁ウ
」5丁オ
」5丁ウ

つへしと書て世々のいましめを
たれて万人これをつゝしむへき
心はへをしめし侍るにや此物語を
よみたる人のおもふへき所なるへし

3其うらみましてやらんかたなし
天子は民の父母にて仁愛をのみ
たれさせ給ひ内に恨みの女なく
外にうらみの男なくこそおはし
ますへけれかくそゝろに色を好ま
せ給ひてあまたさるましき人の
そしり恨みをおはせ給ふ事を書
しるしてみる人のいましめとし侍
にやすへて尊貴の大人にはまの
あたり諫言をいれかたき物也
たとひ義臣有てしゐて折檻
をなし奉るとても機嫌あしき
時は其かひなき事おほしさ
れはかやうの物語ゑさうしなと
にて何となくいましめをきて
みる人みつから発明せんことを
微意にてかけるなるへし

4それにつけて世のそしりのみ
適子衆子品あるへき事のいま

」6丁オ

」6丁ウ

」7丁オ

しめなるへし父母として適子よ
り弟を愛して兄にひとしから
しむるためしまゝ有て鄭の
荘公の弟大叔段母武姜の寵
にのりて都城百雉に過たるも
終にみたれのもとなりし孤竹
の君の二子のたかひにゆつりし
たくひ我朝にも宇治のみこ
のことき人はよにまれなるへ
きわさなれは父母たる人の
心すへき所なるへし

5其としの夏みやすん所はかな
きこゝちにわつらひて
此巻の最初に此更衣のう
せ給ふ事をかけるは此物語の本
意人間の生者必滅会者定離
の理をしらしめんためなるへし
たゝ紅顔の世路にのみほこりて
白骨となりゆく習ひを忘る
人のいましめなるへし

6ひとのそねみふかくやすからぬ事おほく
君の寵あれは必人の妬みあり
其寵にほこらはいかてか恨みも

」7丁ウ

」8丁オ

」8丁ウ

ふかくつもりて終によこさま
のつみにもあたり身をもうしな
ひ侍らさらんまことに宮つかへ
人の心すへき所なるへし桐壺更
衣はさやうに寵にほこる心もみ
えす心はせのなたらかにめや
すくにくみかたかりし人とかけり
且又人からの哀に情有し御心
をうへの女房なとも恋忍ひあ
へりとみえたりそれすらかくそ
ねみふかゝりきされは君の寵
にあひぬる人はわきて身をへ
りくたり人に情あるへき心はへ
を物ことにさきとすへし

7きてんには久しう上の御局にもまう
のほり給はす月の面白きに夜更る
まて遊ひをそし給ふなるいと冷しう
物しときこしめす
弘徽殿の女御は右大臣の御むすめ
一宮の御母なりし威勢にほこり
給ふ故に君上のかゝる御歎きある
折節にしも月をめて管絃なと
し給ひつゝ事にもあらすおほしけち

」9丁オ

」9丁ウ

」10丁オ

てもてなし給へる事いとあちきなく
まさなし君かく物しときこしめし
諫ませ給へる故に終に人よりさき
に参り給ひ東宮の母女御なりし
かと藤壺に后宮を引こされ給へり
し万人すへてわか権威にほこるま
しとのいましめなるへし是彼紅葉
賀巻にて藤壺ささきにゐた
まへるゆへの微意なりとそ

8此御ことにふれたることにはたう
りをもうしなはせ給ひ
天下に君としてはたはふれにも
道理をうしなはせ給はん事ある
ましきとの教なるへしされは
周の成王の桐葉をもて唐叔虞
を封し給ひし戯れをも周公旦
天子に戯言なしとて終に唐
叔虞をまことに封せしめ給へりし
は道理をうしなふましきためなるへ
し然とも好色の故にはおほく道
理をうしなふたくひ此桐壺の帝
にかきらす其ためし今古すく
なからす一人貪戻なれは一国

」10丁ウ

」11丁オ

乱をおこすとかや上一人道理を失
はせ給は、下万人いかてかみたれ
さるへからんこれ好色の物語にて
好色を戒る微意ある事を知へし
9かよひてみえ給ふもにけなからすなん
なと聞えつけ給へれはおさなき心ちに
もはかなき花紅葉につけてもこゝろ
さしをみえ奉りこよなう心よせ
帝此御ゆるしまし〳〵ける故にかく
心よせし給ひて終にたかひの心は
せを通し給ひつゝまさなき事
の侍しことを書て後代に男女
の中はおさなしとても其心はへ
あるへきいましめをたれたるなり
此藤壺にかく心よせの故に嫡妻
葵上をも御中そは〳〵しかりし
夫婦の和せさるは人倫の大本あち
きなくみたれて家もとゝのほら
す忠孝の道もそこなはれ侍へし
此巻の末に心のうちにはたゝ藤つ
ほの御有さまをたくひなしと
思ひ聞えておほいとのゝ君は心に
つかすおほえ給ふよしをかけりこゝ

」11丁ウ

」12丁オ

」12丁ウ

ろをつけてあちはひつゝゆるか
せにみるましき所なり

」13丁オ

(2)
帚木巻
10すへてにきはゝしきによるへきなゝり
とてわらひ給ふをこと人のいはんやう
に心えす仰らるゝとて中将にくむ
所詮とめるによるへきとの給へる
詞をとかめにくめる也人の詞はつゝ
しむへきわさなるにことに貴人
若き御方なとは心あるへきわさなる
へし此中将は時の左大臣の長男こ
とに宮はらなれは光君にもおさ
おさをとりまいらせしといとむ心
下に絶すゐんふたきゑ合せなと
の勝負をもあらそひ給へりしうへは
なたらかにて下に此心をふくめり
し末々までの心はへ此にくめる
心にこもり侍るにや心を付て見侍へし
11もとの品時よのおほえうちあひや
むことなきあたりの
此品定めに左馬の頭の申す心は
へは光君本妻の葵上に御心とま
らすそは〳〵しくおはします事を

」13丁ウ

」14丁オ

あちきなく思ひていかにもして
御心を改めて本台に心をとゝめ
させまいらせまほしき心にて申す
と心を付てみ侍るへし前後其心を
ふくめりと見え侍り此段も其下
心にていひ出しとしるへしもとの
品も高く時代の覚えも有てや
ことなき人の内々のもてなしをく
れしなとこそはいふかひなからめ
本の品高きに時よの覚えもう
ちあひてすくれたらんはさるへき
事なれは更に珍しき事にも
あらぬといふは畢竟葵上のあり
さまをいへり然とも光君頭君
の前にてはあまりにけやけく
聞ゆへきにつきて何かしか及ふへき
ほとならねはかみかかみはうちをき
侍るとて申さしたるさまなり
諸抄にはもてなしのをくれたるは
女三宮にあたるといひうちあひ
てすくれたらんといへるを薄雲女院
にあたるとはかり註し給ひしは
此左馬頭か本意をよく見得たりと

」14丁ウ

はみえ侍らす若又態秘して抄の
おもてにはしるさぬにもや侍けん
此微意を心得すしては此品定め
の精神なきかことくなるへし
12いてやかみのしなとおもふにたにかたけ
なるよをと君はおほすへし
かの左馬頭あまりけやけきを憚りて
申しさして葎の門に思ひのほかに
心とまる事あり父兄なと顔にくけ
なれといたく思ひあかりて捨かた
き式部か妹の事なと左馬頭か
をよふへきほとのことに申まきら
はすといへと光君はやかて葵上の
御事と聞知給ひける御有さまを
何となくこゝにかく書たる也物語
の書さまの優美言語同断にや
13おほかたのよにつけてみるにはとかな
きもわか物とうちたのむへきを
えらはんにおほかるなかにもえなん
思ひさたむましかりけり
此段は大体女といふ物の十分心に
かなふはなけれは少々の事は見
ゆるしいひたすけて相そふへき事

」15丁オ

」15丁ウ

」16丁オ

」16丁ウ

」17丁オ

をいはんとてまつ我物と思ひ
定めん人は有かたき事をいひい
て、おのこの世のかためとなるへ
きも有かたけれと諸司百官た
かひにたすけられて事広き
にゆつりあふたとへをいひて人の
妻を必しもわか思ふにかなはねと
見初し契りを捨かたくして
思ひ定むへき事をいへり是も葵
上のおほしめすに叶はすとも初め
よりみなれ給ひし御中也ことに
其御身のほとも光君の好逑ひ
にておはすれはおほしさたむへき心
をいへりさて此草子をみん人にも
其心を教るなるへし次の詞に
偏に物まめやかに閑なる心の趣き
ならんよるへをそつゐの頼み所
には思ひをくへかりける（云々）すこ
しをくれたるかたあらんをもあ
なかちに求くはへしうしろや
すくのとけき所たにつよくは
うはへの情はをのつからもてつ
けつへきわさをやなといへる此

」17丁ウ

段の肝心なるへし是を細流等
の抄にも葵上に当ると注
せられしもとより左馬頭か本意
ならんかし
14君のうちねふりて詞ませ給はぬ
葵上を御心にとゝめ給はぬ故此左
馬頭等の詞の御心に叶はぬさま也
15りんしのもてあそひもの
時々うち語ふ人のたとへなるへし
16うるはしき人のてうとのかさり
麗（ウルハシキ）きはみたりならす正しき心也
是本妻のたとへをいふ也
17ほうらいのやまあらうみの
時にあたりてけしきはむみるめの
情のたとへなるへし次の手跡のた
とへのてんなかにはしりかきなといへ
るもおなし
18猶しちになんよりける
前の三のたとへも皆実なるには
しかしとの心をいひて大かたの女の
うへをしちなるを肝心と教てま
ことは光君に葵上こそまめ人に
おはしませは御心をとゝめさせまいら

」18丁オ

」18丁ウ

」19丁オ

」19丁ウ

」20丁オ

せまほしき心を左馬頭のいへる也其
故に奥のおほいとの丶方へまかて給
所にも大形の気色人のけはひもけさ
やかにけ高く乱たる所ましらす猶是
こそは彼人々の捨かたく取出しまめ人
には頼れぬへけれとおほすと有

19さることゝはおほすへかめり」20丁ウ
左馬頭の諷詞によりて光君も自
得し給へる心也善人と居るときは
芝蘭の室に入かことし久しうし
て其かうはしきことを知ると家語
にいへるまことなるへし

20かけかねをこゝろみにひきあけ給へれは
女のふしとなとのをろそかならんは必
此あやまちいてきぬへき心の教成へし」21丁オ

21たゝひとりいとさゝやかにて
女房のかたはらにはめのとにもあれお
となしき女なとを置て寝へしとの
いましめに只一人ふしたるあやまちを
かきてみせたる也後の方違の所に
わた殿に中将といひしか局したるか
くれかにうつろひぬと有又人々
さけすをさへさせてなんと聞えさ」21丁ウ

せよともあり空蟬の君此寝所無
沙汰なりし事ひとりふしたるあやま
ちを悔てさすかに貞女なれは其心したる
有さまをかきて人のをしへとせり

22をろかならすちきりなくさめ給ふ事」22丁オ
おほかるへし　関屋の巻にて伊与介
うせて後空蟬尼に成し時まゝ子
の紀伊守情なかりしに光君二条院
に空蟬をはくゝみ置て閑にあらせ
給ひしも此時の御契約のをろかな
らさりし故とみえたり草子のかき
さま丁寧なる物ならし

(3)
空蟬巻

23まきるへき木丁なともあつけれはに」22丁ウ
やうちかけていとよくみいれらる
炎天なとゝても女のありかは人に
よく見いれらるゝやうにはあるまし
く用心すへきをしへをかけるなるへし

24かほなともさしむかひたらん人なとにも
わさとみゆましうもてなしたりてつき
やせ〳〵としていたうひきかくしためり
今一人は東むきにてのこり所なくみゆ
女の身さまのいましめなるへし空蟬

のかくつゝしめると軒端の荻の用意
なきをくらへてかきて軒端の荻は顔形
も空蟬よりまされりとみえなから猶
すこし品をくれたりと光君にみえまい
らせし恥かしきわさなるへし果して
空蟬は此つゝしみの心有て光君の
忍ひ入給へるにもよく聞つけてや
をらすへり出たり軒端の荻は此用意
なかりし故によくまとろみていと覚え
す浅ましかりつる有さまことに女の
心すへき事のいましめなるへしさて空
蟬は此心つかひの心にくかりし故末々ま
て光君の御心さしをろかならさりし
に軒端の萩はにくしとはなけれと
御心とまるへき故もなき心ちしてと
有御せうそこもなかりしこと用
意なきに見おとしあなつりおほし
めしたるさまならんかしすへて男も
女もつゝしみを忘るましきことな
るへし夕顔巻にも今一かたはぬし
つよくなるともかはらすうちとけ
ぬへくみえしさまなるを頼みてとかく
聞給へと御心もうこかすそ有けると

」23丁オ

」23丁ウ

」24丁オ

かけり人にあなつらるゝとあなつられぬは
たゝわれからのしわさなるへし

」24丁ウ

25猶かゝるありきはかろ〳〵しくあやう
かりけりといよ〳〵おほしこりぬへし
貴人としてかゝる忍ひありきは
あるましき事とのいましめにかける
なるへし前に此子もおさなきを
いかならんとおほせとさのみも
おほしのとむましかりけれはと有
悪行とはみつからもしりおそれ
なから好色につゝしみを忘て
おほしのとめぬあやまりの末に
只今此あやうきめに逢給ひてか
かるありきはかろ〳〵しく大人の
あるましき事とおほしこりぬへし
とかける実理をしめす詞なる
へし後代にも大人のみにあらす
誰にてもかくみつから心よからぬ
ふるまひしわさはよし人はしる
ましき物をと思ふあやまりに
身のつゝしみを忘て如此のわさ
し給はゝ終にかくおほしこるゝ
うきめあらんとの心としるへし

」25丁オ

」25丁ウ

君子は独をつゝしみて閑居の
所にても不善のふるまひをな
さすみつからこゝろよくする故に
心もひろく体もゆたかなりとか
やもとより悪行をなさゝれは
おそるへき事もなくましてこ
るゝ後悔もなし大人は猶かく
あらまほし

（4）

夕顔巻

26はか〳〵しくも申侍らず
此夕顔上は頭中将の帚木にて
かたり給ひし床夏也かの四君より
情なき事ともをいはせておどしけ
る故に忍ひてにけかくれてしは
し此五条にやとり給へりされはこゝ
にても四君への憚りにて夕顔上
とは人にしらせしとて只我とちと
人にはみせて人々も忍ひ隠せし
ゆへ其たゝちを惟光にも有
のまゝにはいはぬなりさつきの比
ほひよりと侍るもかの長雨晴ま
なき比の品定めの時分なるへし

」26丁オ

」26丁ウ

27けにこれこそなのめならぬかたわなめ
るとむまのかみのいさめおほし出て
善人にふるゝしるしに光君も
かくおほし出るにて悪友をさけ
益友にのみましはるへき心をしめ
す詞也花鳥餘情云雨〇夜の物語は
好色のいさめなれはおほし出たるなり
いつくの詞と慥にはみえさるにや云々

」27丁オ

」27丁ウ

28女はいと物をあまりなるまておほし
しめたる御心さまにて　六条御息所の
かく執ねき本性にて夕顔上葵
上紫上女三宮なとに生霊死霊に
なり給ひし其あらましをかける也

29おほやけことにそ聞えなす
中将われにけさうし給へるにはし
なさす御息所に御心とまらて朝
霧の晴をまたて御出あるといひ
なす也宮使へ人の心つかひを教る也

30人はすくなくてさふらふ限りは皆ねたり
奉公人の旅寝の折の用意を教へ
かつまた大人のあまりなるやつれ
姿には必あやまちあり後悔の
ことあるへきいましめなるへし

」28丁オ

」28丁ウ

31かいさくり給ふにいきもせす

こゝにて夕顔上うせ給ふ事人
間の愛別離苦のことはりを
しめしさとらしむる也

32わかはか〳〵しくは
若き主君なとのあるましき御ふる
まひあらは忠臣有ていさめ奉り
道理をのへて御心つけ申やうに
あるへきをたゝにをもねりした
かひつゝ終に主君にもかゝるうき
めをみせ申われもかく悔み侍る
とも何のかひかはあらんかねて心す
へしとのおしへなり

」29丁オ

33猶かく人しれぬことはくるしかりけり
とおほし知ぬらんかし　此猶かくといふ
と空蟬巻に猶かゝるありきといふと
同意の文法也好色の道は国中間道
の人しれぬ事なれはおほくの人
こゝにおゐてつゝしみを忘れてある
は不善のわさ不義のふるまひをも
なすとはいへと終には身のため人の
ため無益の苦患になるよしのいま
しめ也是此物語の微意なるへし

」29丁ウ

(5)
若紫巻

34人のくになとに侍る海山の有さま
すま明石の巻かくへき微意也

35こんかうしのすゝの玉のさうそくしたる
細流云或人法隆寺に太子の念珠一
連あり彼寺の縁起にもみえたり
花鳥餘情（云々）には聖徳太子の数
珠の事いまたみ出し侍らすとの給へり
元禄七年七月十四日法隆寺の古物
を江戸にもて来て無縁寺にて見
せたりしを湖春とゝもにおかみに
まうて侍るに金剛子のすゝ（ママ）有て
金銀瑠璃等の玉のさうろくし
たり即縁起にもあるよし堂僧
かたりし細流の説無疑物なるへし

」30丁ウ

36とよらのてらのにしなるや
弁の君此哥をうたふに鞍馬寺の
よしあるのみにあらす深き微意
あり光君に皆心よせの君達なれ
は御位にもと思ふこゝろをこめたり
其故は続日本紀卅一巻云光仁天皇
嘗（カツテ）龍潛（カウセン）之時童謡（カワラワラベノウタ）ニ曰（ヒテ）葛城寺（カツラキノマヘ）乃前
在（ナルヤト）也豊浦寺（トヨラノニ）乃西在（ニシナルヤ）也於志（シ）止（ト）度（ド）刀

」31丁オ

」31丁ウ

志止度桜井尓白璧之豆好璧之豆久也度
於志止度刀志止度然為波国曽昌
ユハ由波ヤ五家ソ曽昌良止由流也於志止度刀志止度
于時井上ノ内親王為レ妃識者以
為井ハ則内親王ノ之一名白璧為二天
皇ノ之諱一蓋シ天皇登一極ノ之徴也
これは光仁天皇は天智天皇の御孫
施基皇子の御子にて久しく諸
臣にてうつもれおはしましけれと
聖武天皇にさるへき皇子なか
りしゆへ孝謙天皇女帝にて崩
御のゝちおもひかけす六十三歳にて
御即位ましく〳〵ける其嘉瑞の童
謡なれは光君に祝儀せられし也
此義河海花鳥弄花細流
等の諸抄にももらせる
処なり

」32丁オ

37うへのおほつかなかり歎き聞え給ふ
御けしきもいとおしう見奉り
なからかゝる折たにと心もあくかれ
心のつゝしみを忘れて偏に
私心にまかせ侍らはまこと

」32丁ウ

にせすといふ事もなくか
やうにあちきなく成ぬへき
物そと人にみせしらする
心なるへし或人問云人のいまし
めとするとならはいかてか聖賢
のふるまひ節婦の貞操
をかきてこそあらめあやな
き妖艶不義のわさをかきて
好色のなかたちとなす事如何
答云聖賢の詞貞女のわさは
旧記に既に書顕して誰も見
聞侍りぬ今此草子には態好色
のかたうとく成てうへにはその
たよりなるやうにて下にいまし
めをふくめてをのつから善に
みちひくならし春秋史記なと
にもさま〳〵の不義のわさとも
を書伝て勧善懲悪せられし
是亦好色の媒といはゝ可なら（ママ）や
たとへは此物語のさまは巽与の言
のよく人をよろこはしめて微意
をふくめしたくひとしるへし

」33丁オ

」33丁ウ

38女は心やはらかなるなんよき

」34丁オ

紫上はしめに此をしへをうけ給
て終に此物語の女の本に成給へり
諸抄にひく所の陰は柔順にして陽
にしたかふといへるは周易のことはり也
又後漢書に陽は剛をもて徳とし
陽（ママ）は柔をもて用とす男は強を
もて貴としとし女は弱をもて美
とす等の本語もみな其儀なる
へし

」34丁ウ

(6)
末摘花巻

39つゝましきことなからん見付てしかな
葵上六条御息所なとはこと〳〵し
き覚え有て親はらからなとも
あり世の聞えを思ひなとつゝま
しき事ありてむつかしきにかの
夕顔上はさやうのこと〳〵しき覚え
もなくらうたけにやはらかにて
相あふにもつゝましき遠慮もい
らさりし人也其人をこりすまに
忘れかたうおほす故にさやうに
つゝましき事なからん女をいかて
見つけんとねかひ給ふ也さて末摘
花の君を書出んとての微意也

」35丁オ

」35丁ウ

40やつれたる御ありきはかる〳〵しき
事も出来なんとをし返しいさめ奉る
大人の微行をいさむる詞也たゝ頭
中将の源氏を諫る詞と計は不可思

」36丁オ

41親はらからのもてあつかひ恨るもなう
心やすからん人は中〳〵らうたかるへき
前にいとらうたけならん人のつゝ
ましき事なからんみつけてしかな
とある首尾なり光君夕顔上を
忘れかたくして末摘花を尋ね
出給へるは前後此ねかひ有し故也
扨興言をかける作物語の趣向奇妙也

」36丁ウ

42けにしなにもよらぬわさなりけり
帚木巻品定に今はたゝしなに
もよらしなといへる詞を思ひ出てけ
にと光君思ひあたり給ふ心也但こ
この心は人は只身のもてなし用意
専要なる教なるへしたとへは
学さるときは公卿の子も庶人
となると勧学文にいへるもをの
つから同意なるをしへにや

」37丁オ

43あやしきことの侍るを
此段も亦興言なから身に応せぬ

贈物なとせんは見苦かるへき事の
いましめ也貧き者は貨財をもて
礼とせすと礼記にいへる思合すへし

(7)
紅葉賀巻

44人のみかとまておほしやれる御きさ
き詞のかねてもとほゝえまれて
ひとのみかとは異朝をいへり藤壺の
御おほえ此時既に春宮の女御に
立まさりて后かねにおはせし有
さましられたる体也果して此巻
の末にて立后の御事あり物
かたりの作りさま優美にや

」37丁ウ

45例のうるはしうよそほしき
葵上の有さまをいふには必うるはし
うとかけり礼節たゝしきさまなり
内に貞操有て外に此行粧をのつ
からある実の本台のさまを教
ゆるこゝろなるへし

」38丁オ

46何ことかは此人のあかぬ所は物し給ふわ
か心のあまりけしからぬすさひにかく
恨みられ奉るそかしとおほししらる
光君の心にも葵上のかたちあり
さまに不足はあらねとあまりけしか
らぬ私意にひかれてとみつから
おもひしり給ふよに好色の人なへて
此けしからぬすさひにてはてには
身をそこなひ国家をうしなふこと
のいましめなるへしみつからけしから
ぬ悪行としらは早くあやまりを
改めさるをろかさよ

」38丁ウ

47みやの御心のをにゝいとくるしう
わかあやまりをみつから知てそらお
そろしくおほゆるを心のをにといふ也
かく心にあやまつ事あれはおそるましき
人にをそれ恥ましき所にはちて
顔かたちもゆたかならすかやうにて
は何のたのしみかはあらん平生を
つゝしみて心にこゝろよからぬ事な
けれは誰におそれたれにかはち
侍らんさてこそ花鳥風月もま
ことに愛すへく鉦鼓管籥も誠
に楽むへけれあたら后の御位に
て一念の御あやまりの故に御心の
をに身を呵責し奉る事を書しる
して貴きも賤きもつゝしむへ
きことはりをしめし侍るなるへし

」39丁オ

」39丁ウ

」40丁オ

48中将のきみおもての色かはる心ちして
おそろしうもかたしけなくも　是も
心のあやまりにうれしくもめて
たくもおほゆへきことをかへりて
おそれ給ふことのあちきなさを
かきしるしてわつかのほとのみそ
かことに一生の身のつゝかを忘る
るおろかさをしめす物なるへし

49えゑしもはてすうつくしう
女のしふねきは人ににくさをまさら
せて益なきわさなるを紫上の
怨しはて給はぬ本性をほめて
かくかきて人を教ゆる也かつ又
紫上おさなくおはすよりかやう
にうらなくにくけなき心なり
しさま後々まて猶有かたき
山口しるきさまなるへし

50物けなかりしほとをおふな〳〵かく
ものしたる心を　此勅言有かた
き御いさめ也光君こそ好色に
ふける御くせにて心ゆかぬけしき
なりけるよしを書侍れ世上の人は
よく〳〵思惟すへき所なるへし

」40丁ウ

」41丁オ

」41丁ウ

51みかと御としねひさせ給ひぬれと
かやうのかたはえすくさせ給はす
父帝色を重くし給へは光君亦
好色にふけりておやのおやと
いふはかりなる源内侍をもかゝる
たはふれ有しとの心をかきて
上一人の御しわさ下万人のもと
となる事をいへりとしるへし

52としいたう老たる内侍のすけ
此内侍のすけのふるまひ此物語の
興言に書てすへて老女にもあれ
老翁にもあれ生得婬欲に
ふける人よにおほからん年齢に
似あはぬことは人のあさけり世
の笑草になる事なへて源内侍
のたくひなるへしつゝしみ
たしなむへきの教なるへし

53我としりてことさらにする也け
りとおこになりぬ
若きほとは血気さかんにてかり
の左礼わさにもあやうきことを
かへりみすかく太刀ぬきなとする
事ありをこかましくかる〳〵しく

」42丁オ

」42丁ウ

短慮なるしわさ必つゝしみ思ふ
へしとのいましめにかけり始めは
たはふれ事と思へとおりにより
相手の心によりてひくにひかれぬ
事になることもあるへし武士の
中にては必事となりぬへくさら
すは狂気の沙汰になりなんとかく
に後悔のもとゝなるへき也たとひ
当座にはことゝならても終に意趣
のたねともならん可慎可恐

54七月にそきさきゐ給ふめりし
桐壺巻に更衣の御愁傷の比
こきてんの女御ことにもあらす
もてけちてもてなし御遊ひな
とし給ひしを帝物しときこし
めしし其ゆくゑ(ママ)かく后宮を藤
壺に引こされしさま也亦慎思へ
きことゝも也

」43丁ウ

(8)
花宴巻

55御心のうちなりけんこといかてもり
にけん　心のうちなる事は人しれぬ
事とおもへと微よりあらはなるは
なく隠よりあきらかなるはなし

」44丁オ

されは一念のうへにも悪事悪行
をおもふへからすとのいましめをふく
めし詞也君子は独を慎むことは
りをおもふへし天しる地しる我
しる汝しるともいへり悪行をな
して人しらしと思ふ事はまことに
をろかなる人のしわさ也

56かたらふへきとくちもさしてけれは
藤壺の御かたの掟正しきさま也

」44丁ウ

57こきてんのほそとのにたちより
給へれは三のくちあきたり
悪后の御かたの心つかひのをろ
かにて終に内侍のかみのあやま
ちいてきたりしを藤つほにくらへ
かきて人のいましめをかけり

」45丁オ

58ふと袖をとらへ給ふ
女の御身にてよるひとりありき
給ひしあやまちを書てみせたる也
女は燭をとらてはよるありかすあ
したにつとめて道ゆかす道の露
おほけれはなりといへりし故実を忘る
へからす光君もかやうにて世の
中のあやまちはするそかしと

」45丁ウ

おほしなからわか心をあさむき
てかく此女君に逢給ひて終には
此人ゆへに須磨のうらみに身を
さすらへ給へりわれあやうしとお
もはんわさは早くやむへきとのいまし
めなるへし
59御かうしともあけわたして人々いて
ゐたり袖くちなとたうかのおりお
ほえてことさらめきもて出たるをふさ
はしからすまつ藤壺わたりをおほし出らる
もて出てをこり花やかなる事を
このむましきいましめなるへし前に
かたらふへき戸口もさしてといへる
と三の口あきたるなとくらへ
かきたる首尾なるへし
（9）
葵巻
60心のすさひにまかせてかくすきわさす
るはいと世のもときおひぬへきこと也
心に敬の一字をかて私欲に
まかせて好色のふるまひすまし
きよしの御いましめ也此物語おも
てには好色を書て下にはいましめ
たりし心是らの詞にて知へし

」46丁オ

」46丁ウ

」47丁オ

61かゝる事を聞給ふにもあさかほの姫
君はいかて人に似しとふかうおほせは
高きも賤きも光君に心をう
つさぬはあらぬに朝顔の君は
其かろ〳〵しき人なみにはあらし
とおほして一生難面てやみ給へ
り貞節と淫嬖とは心をたつる
とたてぬにあるをしへなるへし
62わかきものともゑひ過立さはき
たるほとの事はえしたゝめあへす
下部に酒のまする事は心する
こと昔も今も大切のいましめ也
花宴巻にも酔心ちやたゝ
ならさりけんと有高きもくた
れるも酒の失世に其ためし
同々にあり夏の禹王の旨酒
をうとみ給ひしをはしめ乱に
及ほさぬ孔子の御こと
飲酒の戒め後の世まてもいとおそ
ろし紫式部の微意浅からぬわさ也
63大将殿をそかうけには思ひ聞ゆらん
葵上も大将の北方にあらすやいかて
御息所にしもかくはのゝしるらん猶

」47丁ウ

」48丁オ

」48丁ウ

又こゝに大将の御事をかけていふ
へきわさなりやはかやうのすちなき
悪口も酔過たるゆへのよしに
書なして酒の失をいましむるならん
64つゐに御車ともたてつゝけつれは
ひとたまひのおくにをしやられて
あふひの上の只今の威勢により
て他のそしり恨みをもかへりみ給は
さりししわさかへりて御身のあた
と成て終に御息所の霊気の
愁にあひ給へる事を世々の
いましめにしるしてみせたる也
65みつからはさしもおほさ（ママ）らめれとか
かるなからひは情かはすへき物とも
おほいたらぬ御心をきてにしたかひ
てつき〳〵よからぬ人のせさせたるならん
かゝる中らひとは本妻と思ひ人と
の中の妬みあるへき中也かやうの
中には猶おとなしやかに情を
かはして紫上の明石上花散里
なとへの心つかひのやうにあらま
ほしき物なるへし御心掟にした
かひてといふは下々の悪行雑言

」49丁オ

」49丁ウ

」50丁オ

は主君の下知とにはあらねと平
生の主君の心むけにしたかふ物なれ
は其とかをのつから主君にも
のかれかたかるへしかねて身を正
しくして仁義を心さして下人
をも制し随かはすへき教也
66はかなかりし所の車あらそひに
人の御心のうこきにけるをかの殿
にはさまてもおほしよらさりけり
細流弄花等の抄にも人の恨む
へき所をかへりみさるは悪き事
也惣して権門のかたには不肖
の方の恨あるをはしらさる物也
かやうの所を心をつくへしと云り
もしおもはすに下人なとの主を豪
家に思ひて不肖の方へあち
きなきふるまひをなしたる事か
もしは同輩の人に対してもよか
らぬわさせし事あらは事により
てみつから其方へゆきむかひ
又は人をつかはしてもわかしらさり
しことはりをのへつゝよくいひ慰
めて其下人をあるはをひうちあ

」50丁ウ

」51丁オ

」51丁ウ

るはからめてもつみの軽重に
したかひてをこなふへし是今の世
の定れる時宜とかや
67大殿には御ものゝけめきて
みそき川のあらかりし瀬にいと、
よろついとうくおほしいられたりと
書はて、其つゝきに葵上の御
物のけのさまを書出たるは彼恨
のゆへとしらせん微意あるにや
68大殿には御物のけいたくおこりて
是はかの浅みにやの贈答ありお
ほろけにてや此御返りをみつか
ら聞えさせぬとの事有ていと、
光君をおもふ心も切に葵上の妬
さもまさりしより御息所の霊
気いたくおこり給ふさまのかきさ
ま也前には只御物のけめきてと
かきこゝにはいたくおこりてとか
く筆力あさからぬ物なるへし
69とのゝうち人すくなにしめやかなる
ほとに俄に例の御むねをせきあけ
油断のほとに物のけの取いれ
たる也是権門のふるまひの失

」52丁オ

」52丁ウ

」53丁オ

をしめし世のむくひある事を
をそるへきのいましめ也かつ又盛者
必衰会者定離のことはりをしめ
して菩提の縁となし侍るにや
70ほのめかし給へるけしきを心のをにゝし
るく見給てされはよとおほすもいといみし
霊に入給へる事を源氏に見知
給へりと御息所の心の鬼に思ひ
あはせ給へる誠に面目もなき御
事なるへし此斎宮に同道して伊
勢に下向の基なり猶榊巻に委
71女君はさらにおき給はぬあしたあり
葵上の御在世にはさすかに紫上
の新枕はなかりし也うせ給て後
此事有て其人ともよにしられ
給はて物けなきやうなりとて父
宮にもしらせまいらせ給はんとお
ほしなりたるは野合なから本台の
分にとおほす心あれはなるへし
其おもむきに書なせる筆勢
こまやかなる物なるへし
榊巻
72(10)その、ちしもかきたえあさましき御心

」53丁ウ

」54丁オ

はへをみ給ふにまことにうしとおほすこ
とこそ有けめとしりはて給ぬれは
よろつの哀をおほし捨てひたみちに
出たち給ふ　葵巻に心をくらん
ほとそはかなきとほのめかし給へ
るけしきなりし事の恥かしくい
みしきに京には留りかたく思給ふ也
73院の御なやみ神無月になりては
桐壺の帝此巻にて崩御也
うき世の生老病死は帝王も
のかれましまさぬことはりを示
す物也但仙院なとにて此物語
を講せんにはこゝより御位を
さらせ給ふといふはかりこそあれ
といふまてをよみ侍ましくや
74おほやけの御うしろみをせさせんと
此明石巻におほやけの御後見を
しよをまつりこつへき人をおほし
めくらすに此源氏のかくしつみ給ふ
事いとあたらしうなといへる所の微
意にて桐壺巻におほやけの御うしろみ
をするなんゆくすゑもたのもしう
なと有し所の首尾なり

」54丁ウ

」55丁オ

」55丁ウ

75おほきさきもまいり給はんとするを
中宮のかくそひおはするに御心をかれ
ておほしやすらふほとに
弘徽殿は桐壺帝の御とちめにも
あひ奉り給はぬさま也かの桐壺の
巻に事にもあらすおほしけちて
もてなし給ふをいとすさましく物
しときこしめすなとあり弘徽殿
の御いきをひにほこり給ひて帝と
の御中もうるはしからさりし下心
有て終に其御ありさまも首尾
よからぬさまにかきなせる文勢奇
妙にや
76おほちおとゝいときうにさかなう
寛順大度の器にあらさりしさ
ま也此おとゝ学問もさしてこのみ
給はすをこりほしいまゝなる本性
におはしけれと幸にこきてんの
父朱雀院の外祖の故に世の政
をとりをこなひ給ふさまなり
77いとしのひてかよはし給ふことは猶
おなしさまなるへし
朧月夜の尚侍貞節の心なく

」56丁オ

」56丁ウ

」57丁オ

帝の寵をかうふりなからあるま
しき御事なり光君も此人により
て一旦左遷し給へり帚木巻に
何かしかいやしきいさめにてすき
たはめらん女には心をかせ給へあや
まりて見ん人のかたくなゝる名
をもたてつへき物也と左馬頭の
いましめよろつの教にわたるへし
78こひめきみをひきよきて此大将の
君に聞えつけ給ひし御心を
桐壺巻に葵上を春宮より御
けしき有けるをおほしたゆたふ
ことありけるは此君に奉らん
の御心也けりと有てことなり（ママ）
此宿意を悪后の忘給はぬゆへ
さま〳〵世のさはきとなりて終に
御身のためもよからさりし世人旧
悪をおもふましきのいましめ成へし
79こあまうへの御いのりのしるしと
仏神に信心あるへき事の世人
の教なるへし明石の入道のこ
と玉かつら尚侍の初瀬まうて
光君のさまにて（ママ）住吉へ御祈願

」57丁ウ

なとみないちしるきしるし有
さまをかきたる心をつけ侍るへし
80かやうの事につけてもてはなれ
つれなき人の御心をかつはめて
たしと思ひ聞え給ふ物から
すきたはめる朧月夜にかたくな
なる名をなかし給はんとするから
藤壺のつれなき御心を感し
給ふ也かの左馬頭のいましめを
誰もおもふへしとの微意にや
81おほしいたらぬことなくのかれ給ふを
朧月夜の遠慮おはしまさゝ
りしにあはせて藤壺の御心
深かりけるさまをかけり院
おはしまさぬ世には其憚もなく
をのつからあこきの網のたひ
かさなるへけれは必うき名世に
なかれて光君のためわか御
ためことには春宮の御ためまて
あちきなかるへきにかく色々に
のかれ給ひて終に此後御対面な
かりし故世の聞えを一生のかれ
て過し給へる事を書て世人に

」58丁オ

」58丁ウ

」59丁オ

」59丁ウ

」60丁オ

も見知せたる心なるへし
82そむきなんことをおほしとるに
藤壺よの常のさまにておはしま
せは光君の心さしやますやまぬに
したかひ給はゝうき名あちき
なかるへししたかひ給はすは光君
もし難面にうむして道心なとあらん
に又春宮の御うしろみなくてあち
きなからんとにかくによの常にて
は有かたき御身なれは入道せさせ
給はんと思ひとり給へるかしこき
女心のさまを書て世人に思ひと
るへきときはおもひとるわさそ
と見ならはすためなるへし前に
大后のあるましき事にの給ふ
なる御位をもさりなんと漸々
おほしなると書て戚夫人のこ
となとおもひあはせ給ひて
御身をうとましうたゝよのつね
にては過しかたき物に思ひ給て
発心をおほしとりしさまにかき
なせる哀をつくせる文章にや
83六十巻といふふみよみ給ひおほつか

」60丁ウ

」61丁オ

」61丁ウ

なきところ〳〵とかせなとして
光君おさなきよりわさとの御
学問はさる物にて万の事をま
なひきはめ給ひ世をまつりこ
たんにもおさ〳〵憚りあるましと
故院もの給ふほとなれは治国平
天下の道のまなひはおほつかな
かるまし其上に只今よに用られ
給はす閑寂のほとに天台の六十
巻をもよみ給ふまことの世のか
ためなるへき器におはしける
有さま也亦人の教なるへし
84文の道のおほつかなくおほしめさる
る事ともなととはせ給て
朱雀院も春宮におはせしより
才すくれさせ給へるよし花宴巻
にみえたり然るに光君に猶と
はせ給ふは光君の広才のさまの書
さま也天下を治め給ふ君も臣も
学問を御心にかけさせ給ふへしと
の教にかけるにや宮殿のうち
に富貴を極めおはします御身
はたゝ栄花にのみほこり極楽

」62丁オ

」62丁ウ

」63丁オ

にのみかゝつらひて学問に御身を
くるしめおはします事はこのませ
給はぬ事なるへし然とも文学な
くてはおこりをのみきはめて民の
愁へ国のそこなはるゝをもしらせ
給ふましくは堯舜の道に疎く
桀紂か暴に近きわさなれは也
85白虹日をつらぬけり太子おちたり
是冷泉院東宮にておはします
を太子丹になそらへ光君を荊軻
にたとへし此詞に光君を讒し
みかとをかたむけんとし給ふにしな
すへき悪后の心かまへみえ侍る書さま也
86いつこにもけふは物悲しうおほさるゝ
ほとにて御返あり
常には藤壺の光君へ御返事な
きことしられたる心なり
87又いたつらにいとま有けなるはかせとも
此詞にて朱雀院のおほちおとゝの
まつりこち給ふ世には学文はやら
さりけるさま也紀伝明経等の
博士いたつらに隙なりしなるへし
88文王の子武王のおとうと

」63丁ウ

」64丁オ

」64丁ウ

光君を周公にもなそらへてかき
たるよし諸抄にいへるは是らの
詞須磨巻なとによりて也又須
磨明石の巻に風雨雷電をかき
て周公旦の東都におはせしに
准してかくへき微意なるへし
89例のめつらしき隙なるをと聞えかはし
給てわりなきさまにてよな〳〵対面し給
好色にふける人はしめは人めをも憚
後の聞えをもつゝしめともつのりて
は其憚つゝしみを忘て度かさなり
もてゆくに終に身をほろほすに
いたる事をいましめんとて此尚侍
の有さまはかけりとしるへし
(11)花散里巻
90いかなるにつけても御心のいとまなく
あたなる心に任て思ひ人おほく
かゝつらふ人の却て身の苦しみ
なる事を書て好色を戒めたり
(12)須磨巻
91いちはやきよのいとおそろしう侍る也
悪后父おとゝの御心きうにおは
しける事有し首尾也悪后仁愛

」65丁オ

」65丁ウ

なき心に任給ふ世の有さまをいへる也
是亦政道のいましめを書なるへし
92た、かく思ひかけぬつみにあたり侍るも
思給へあはする事の一ふしになん
藤壺と密通の恐なるへし此次
に院の御陵にて有し御面影
さやかにみえ給へるそゝろ寒き程
なりとかくへき微意也光君更生の
恐れなりし心はへをかける可付心
93位なき人はとてむもんの御なをし
公儀を恐給ふ礼儀なるへし此巻仁
義五常朋友の中らひ迄いへりと
泯（ママ）江入楚にも云る可付心也称名院
源氏物語を盛者必衰の心にて見
よと也と孟津抄にいへるさる事にや
先源氏君の御有さま偏に盛者必
衰也頭中将すまへおはせしは朋友
の中らひの有かたきさま也此御
いたはりにかゝらぬ人なく御徳
を悦はぬやは有しなといへる光
君の仁なるへし恩賜の御衣を
身にはなさす朱雀院の御こ
とを忘給はす帝も源氏の御

」66丁オ

」66丁ウ

」67丁オ

事を其人のなきこそさう〳〵
しけれなとの給ひし事須磨へ
御供の惟光義清右近のそう
なとの事ともは君臣の義ある
なるへし其外こと〳〵くいふに
及はす此巻のさまにみえたり
94あこの御すくせにて覚ぬ事の有也
明石の入道夢を頼む事ありか
つ又住吉に立願有て明石上の
よき縁をねかふに其願成就の時
至ると悦ふさま也若紫より
若菜巻等皆其心をかける
物語の筆法奇（ママ）也若菜巻ニ
か、る願（ママ）有てあなかちには望
しなりけりよこさまにいみしき
めを見た、よひしも此人ひとり
のためにこそ有けれと光君
思ひあはせ給へる事其首尾也
明石巻
95猶これよりふかき山をもとめてや
すまの巻に此すまゐたへかたく
おほしなる事を終りに書て
山居をやせましなといひとにか

(13)

」67丁ウ

」68丁オ

」68丁ウ

くにさま〳〵此浦に住うき事
の侍るは神のしわさにて明石へ
おはしまさせんためとみゆ故院
の御夢にみえさせ給ふ所にも
住吉の神のみちひき給ふまゝに
はや船出して此浦をさりねと
の給はするも其心なり
96いぬるつゐたちのゆめに
これも住吉の示現なるへし
97月日のひかりを手にえ奉りたる
入道の明石上をまうけし時の
夢に月日を手にさゝけしと
見し事若菜上巻にありこれ
光君に明石上をあはせ奉て
明石の中宮をまうけ其みこに
春宮あるへき瑞夢也然るに
とし比の所願かなひて今光君
のおはしますにすてに其瑞
夢のしるしある心をいふへき
ためなり日は天子の象月は后
の象なれはなり
98せきへたゝりては
須磨はむかし関所なれは也

」69丁オ

」69丁ウ

」70丁オ

99みかとの御夢に院の帝おまへの
御はしのもとにわたらせ給て
前に源氏の夢にもかゝるつ
ゐてにたいりにそうすへきこ
とあるによりてなんと桐壺の
帝の給ひし首尾なり
100源氏の御ことゝもなりけんかし
榊巻に桐壺帝の御遺詔に
大将の御事侍つる世にかはらす
大小の事を隔てす何事も御
後見とおほせと朱雀院へ仰せ
られ又其心たかへさせ給なと哀なる
御ゆいこんともおほかりとあり
帝は光君を此御遺言のことく
におほしめせとも悪后のしわさ
あちきなくおはせしに母君の御
事をさすかに背かせ給はぬゆへ
故院の御遺詔にをのつからたか
はせ給へは御けしきあしうてにら
み給ひなとせしなるへしいま
源氏の御事ともなりけんか
しと草子地にいふは其心を云也
101きさきに聞えさせ給ければ

」70丁ウ

」71丁オ

」71丁ウ

これらの詞にて源氏の解官は帝
の御心ならす悪后のはからひな
ることをしらする詞也此次に后
かたういさめ給ふにおほしはゝかる
なといへるも其心也榊巻にも
帝は院の御遺言たかえす哀ニ
おほしたれととあり母后おほ
ちおとゝとり〳〵にし給ふ事は
えそむき給はす世の政御心に
かなはぬやうなりとあり

102 おほやけの御うしろみをし世をまつり
こつへき人をおほしめくらすに
榊巻桐壺帝の御遺詔の首尾
也ことには桐壺巻おほやけの
御うしろみとなるなん行末もた
のもしき事とおほしていよ〳〵
みち〳〵のさえをならはし給ふと
ありし首尾なるへし

」72丁オ

103 色々の願はたし申へきよし御使して
水尾尽巻住吉詣有へき微意也
104 十五夜の月おもしろふ静なるに
昔の事かきくつ(ママ)しおほし出られて
須磨巻八月十五夜の所の殿上の
御あそひ恋しくなと有し所に其夜
うへのいとなつかしう昔物語なとし
給ひし御さまなと有し其時の
事を朱雀院もおほし出らるゝ成へし
冷標巻

」72丁ウ

(14)
105 物思ひしられ給ふまゝになとて我心の
若くいはけなきにまかせて
さしも好色なりし朧月夜尚侍も
年たけて物思ひ知給ふては若かり
しほとのしわさを後悔し給へり世
上のわかき人々かねて此事を覚(ママ)語
してわかけに任せたるふるまひせ
されとの微意なるへし

」73丁ウ

106 御国ゆつりの事にはかなれは
かねて御沙汰あらは悪后必さま
たけ給へきによりてとくおほし
をきたる事なれと忍ひこめ
させ給ふ事をこめたる詞なるへし

」74丁オ

107 太政大臣になり給ふ
令云太政大臣一人師範一人儀形
四海云々有徳の人をえらひて任
せらるゝ官なり

」73丁オ

108 わかきみの御めのとたちさらぬ人々も

」74丁ウ

年比のほとまかてちらさりけるは
零落のほとをみとゝけたるに恩
賞ある也君臣の中にかきらす
夫婦朋友の間にも心短くたの
もしけなくはあるましき事と
のいましめとしるへし
109 此ほとすくしてむかへてんとおほして
東院いそきつくらすへきよし催し
此院明石上をゝき給はんの心かまへ
なりしとみゆ然とも明石上は母
の古郷大井に在しにうつろひ給ひ
けれは此院には花散里住給ふ也
110 忍ひまきれておはしまいたり
此乳母さすかに宰相のむすめな
れはたゝに明石浦にはおもむくまし
くやと光君おほしてみつからおは
して其人からをもみ給ひかつは猶豫
すらん心をも取定め給はんためなる
へし伊尹か湯王につかへ諸葛か三
顧に答しためしをおもふへし
111 つのくにまては舟にてそれよりあな
たは馬にていそきつきぬ
津の国よりも舟にてもゆくへ

」75丁オ

」75丁ウ

」76丁オ

けれと波上をおほつかなくおほ
す心なるへし是も姫君を大
切におほしめす故なるへし
112 はらたちなし給ふ
紫上の物えんし給へるさまを
いふ也すへて女の嫉妬はさまあ
しくにくけなる物なるを中〳〵
愛敬つきてはらたちなし給ふ
と也帚木巻ニすへて万の事な
たらかにえんすへきことをは見し
れるさまにほのめかし恨へからん
ふしをもにくからすかすめなさは
それにつけても哀まさりぬ
へしといへる女はよく思ふへき事にや
113 あた〳〵しきすちなとうたかはし
き御心はへにはあらす
花ちるさとは顔かたちはよからね
と貞節にて長閑なる心はへな
れは紫上明石上なとのなみに
六条院の四町にも夏の御かた
とて夕霧の養母なとにておは
しける女は貞節をもとゝす
へくのとやかなる心はへなるへき教

」76丁ウ

」77丁オ

なるへし美目かたちは次とすへし
114 中〳〵いとおしけなるを人もやすからす」77丁ウ
聞えけり
一旦の威勢にほこりて因果の
理をもわきまへ給はぬをそしり
申せし詞也世人のいましめ也
115 おかしきことも物の哀も人からこ
そあへけれ
遊女のよしめきあへるも光君の
風流にはかなはすして御心と、
め給はすうとみ御覧したる心也
上達部といへと遊女にめと、め
給ふをそしりて光君の好色第」78丁オ
一にてかくある事をほめたる詞
なり高きもいやしきも是に
まよふことのをろかさをいましめ
たりしに心をつくへし
(15) 蓬生巻」78丁ウ
116 いけるよにしかなこりなきわさはいか、せん
父母の旧宅をかろ〳〵しく人に
はなちやり給はぬをほめし詞也
117 なき人の御ほいたかはんか哀なる事
との給ひてさるわさはせさせ給はす
父母のしをき給へる調度を沽却
せんことを悲しきことにし給ふさま
也さるわさとは売給ふ事を云也
此二段末摘花の貞心にてまつしく
ても親の家財をかろくせぬ御心
さまをかきて此心より源氏を待
給ひて他にうつる心もましまさす
終に時節を待得給へる事を
かきて世人の教をかく也世のあさ
はかなるひとのあたなるわさに」79丁オ
貨財をついやしてはては父母の」79丁ウ
古物を市にひさき重代の家を
人のものとなす不孝不義いはん方
なく天罰神罰いかてのかるへき
をそれつ、しむへき物なるへし
118 ことよかる
好言令色鮮矣仁と論語にいへる
詞にてかけるなるへし此おはの心
さましわさ無礼不義みる人きく」80丁オ
人ことにくまれぬへし人ににくま
れ人によみせらる、もた、わか心
の人やりならぬしわさとしりてた
しなみつ、しむへきことはりなるへし

119 わか心もてはかなき御てうとともな
ともとりうしなはせ給はす
此てうとゝもなともといふに前の
詞の御家居も有しよりけにあさ
ましけれとゝいふをうけて家をも
うしなひ給はぬ心をこめたりさて
前の名残なきわさはいかゝせんさる
わさせさせ給はすといへる首尾を
かく也前は猶大かたの貧しかりし
ほとのさまこゝは極りて乏しきさ
まになり給ひても猶心つよく
おなしさまにて念し過し給ふな
りけりとかける筆力有て哀也
知仁勇の勇のこゝろにて心つよ
くと書たるへし松柏の年の寒き
に其みさをゝあらはすたくひ
君子の貧賤に素してをこなふと
いひつねの座なきにもつねの心を
うしなはさる士の有さま誰もおもふ
へき所なるへし

」81丁オ

120 よきくるまにのりておもちほこりかに
師説云まつしき所なとへほこりかなるさ
まにて入くるは礼にたかふ心也心浅き
人のするわさ也礼記内則ニ適子庶
子祗事ニ宗子宗婦ニ雖ニ貴富ト一不下敢テ
以ニ貴富ヲ入中宗子之家上雖レ衆ニ車徒一
舎ニ於外ニ以ニ寡約ヲ入ルニ不下敢テ以ニ貴富一加中於
父兄家族ヲ在湖月抄上

」81丁ウ

121 かくはるかにまかりなんとすれは
うしろめたくあはれに覚え給ふ
前にことよかるとありし首
尾なりまことの心にてかくいはゝ
哀深かるへき詞なからをのかむ
すめともの後見なとにと思ふ
内心にてうはへはかりにいふなれは
聞からにくゝ侍るへきをいと
嬉しき事なれと世にゝぬさま
にて何かはなとおいらかにいらへ
給ふ末摘花の本性かく人にくか
らぬゆへ光君もあはれみおほし
たるさまの草子の文躰偏に
世人のをしへにや

」82丁オ

122 心はへなとはたむもれいたきまて
よくおはする御ありさまに
彼大弐北方にいとうれしきこと
なれとなといらへ給ひ侍従か故まゝ

」82丁ウ

のいひ置し事をもたかへて見捨
まいらするにもわか御くしの九尺
あまりのかつらくのえかうなとつ
かはして年へぬるしるしみせ給
なとの首尾にかける詞なり
123かの大弐の北方のほりておとろき
思へるさま侍従かうれしき物の
いましはしまち聞えさりける心あ
さゝをはつかしうおもへるほと
零落の人をあなつりわかすこ
しのいきをひにほこるましきいま
しめ也かつ又侍従かさまは末摘
花の心つよく貧窮に堪忍ひ給へ
る心にはかはりてたのもしけなき
後悔を書て又世人の教とする也
」83丁ウ

(16)
関屋巻
124むかしわらはにていとむつましうらう
たき物にし給ひしかはかうふりなと
えしまて此御とくにかくれたりしを
おほえぬ世のさはき有しころ物
の聞えには、かりてひたちに
くたりしをそすこし御心をきて
小君光君のさま〳〵の御恩を忘
」84丁オ

て世になひきて常陸に下りし
を聊疎みおほしめすと也師説云
小君か源氏の君にみやつかへせしは
空蟬に媒の故にむつましかりし
まことの忠義の心にあらねは
終にすまの御難を見と、けさ
りし也右近のせうか妻子をすて
官をとけて御供せし志とはは
かにかはれり世に便佞のともか
ら実なき追従にてさいはいに
近習のむつひをなす者いつれも
小君かたくひなるへしこれを
ならへ記して君臣の道の心は
せのいましめとするなるへし
」85丁オ

125ようなきこと、おもへとえこそ聞え返さね
小君おさなきほとはさもあるへし
成長の、ち姉に不義の使するを
用なき事と思ひなからも詔ひて
え辞退申さぬは自欺くなり
更に誠意のわさにあらすかく
まさなき者なれはすまの御供
をもにけのかれしなるへし其人
となりを各々書わけたりし紫
」86丁オ

126 式部の筆法奇妙にや
かうちのかみのみ昔よりすき心有て
帚木巻にきのかみすき心にこの
ま、母の有さまをあたらしき
物に思ひてついそうしよる心な
れはとあり此紀伊守かまめなら
ぬ心ゆへ空蝉をたゝよはして親
のいよの介か遺言をやふりかくあ
さましき心はへを書しるして
末代の継子のいましめとする也
」86丁ウ

127 のこりの御よはひはおほく物し給ふ
らんをいかてかすくし給ふへき
はしめ情かりける心はへも実の
心にあらす懸想の故なれはこゝに
いたりて親の遺言をもまもらす
見捨るしわさ情なく人倫の大道
すたれて禽獣の有さまにゝたり
あいなのさかしらやとそしりて
人の教とする也
」87丁オ

光君好色にましますゆへ家司の
河内守もかくのことし惟光もくま
なきすき心有てありかさため
す忍ひありきして何かしの院に
てのめしにもはつれ不忠の有さま
あり良清も亦入道の遺言破り
つへき心有とみゆかみを見ならふ
下なれは一人貪戻にて一国乱を
をこすといへり人のかみとしては
身をつゝしみて恭以しもに向ふ
へきのいましめをふくめるこれこの
物語の微意なるへし
」88丁オ

(17)
128 御むすめにきしろふさまにて侍ひ給ふ
をかた〳〵にやすからすおほすへし
絵合巻
権中納言の例のいとみ心也君子
は争ふ所なしとこそ論語にも
侍れ亦人の教也ゑ合あるへき
根さしなり

129 さらにえ見奉り給はぬを
秋好のおも〳〵しき御さまをい
へりまことの后かねなる御
ありさまをかけるなるへし
」88丁ウ

130 又こなたにても是を御らんする
に心安くもとりいて給はすいと
いたくひめて此御かたにもてわた
らせ給ふをおしみらうし給ふを

此こきてんの御心むけのひと
ことよろつにわたるへしいとせは
くおとなしからす人よりさきに
まいり給へと立后なかりしはかやう
のゆへとみゆるありさま也
131長恨歌王昭君なとやうのゑは
おもしろくあはれなれとことのいみ
細流云唯今事の始なる故に
斟酌ある也何も不吉なれは也
かやうの事いかにも心つかひある
へき事と也いはふへき折ふし也
132よはひたらてつかさ位高くのほり
世にぬけぬる人のなかくはえたもた
ぬわさなりけり
河海云後漢書云位―高ケレハ身危シ
財―多ケレハ命―殆アヤウシ云々みつれはかくる
ことはり人つゝしみ思ふへき所也
功―成名遂テ而身退クハ者天之道
也老子経此いましめ忘るへからす
身退く道はしれともむさしのや
のかれすむへきやましなけれは
133中比なきになりてしつみたりし
うれへにかへて今まてもなからふる也

」89丁オ

」89丁ウ

」90丁オ

前に才学いたうすゝみぬる人の
命さいはいとならひぬるはいとかた
き物といへるにかなへり万事に
可思之と細流にいへり
松風巻
134(18)此わかきみの御おもてふせにかすな
らぬ身のほとこそあらはれめ
明石上受領のむすめなれはこの
遠慮常にあり此姫君を後は
紫上にまいらせて養子とせし其
機すてにこゝにあり
135御なをしめしいてゝたてまつる
礼儀を人に教る心はへなるへし
且又わか紫の巻にも母こそゆへ
あるへけれといへり此大井の古郷
兼明親王の事とみゆしかれは
此宮のむすめに准すへきよし弄
花抄に有其故に愛敬し給へるにや
136御寺にわたり給て月ことの十四五日
つこもりにをこなはるへき
富貴権威の御身に菩提を忘れ
給はぬさま也須磨にても御精進
にて釈迦牟尼仏弟子との給へり

」90丁ウ

」91丁オ

」91丁ウ

人として仏道にいれは慈悲深く歎あ
さく無益の殺生をなさすかし
かつは現世安穏の祈祷又は後生
善所の功徳いとめてたし国家を
おさめ民を撫るたよりもとを
からすむかしより貞観寛平の
明君大職冠淡海公等の賢臣を
はしめ武家には鎌倉大将最
明寺等の名将みな仏を信し給へり
故ある事と知へし」92丁オ

137(19)
薄雲巻
あまきみおもひやりふかき人にて
松風巻にても光君御直衣奉り
なと愛敬の御気色有しもかく
かとある所有てよのつねの女性
にはあらさりしさま也此明石上への
異見のさま言々皆道理ありたゝ
ありの舐犢の愛姑息の養ひ
にのちせをかへりみぬ女のたくひに
はあらぬさま也此姫君を紫上に
まいらせしゆへに光君の明石上を
憐みおほす心もまさり紫上の御
妬みもうすくなりて後までも」92丁ウ

明石上に御心よせことなりし光
君への御恨みもはれて夫婦の御
中和合せりまして姫君の御ため
にも御袴着入内立后のほとま
てに疵なき玉のことくなりし
諸方安全の思ひやり深き様なるへし」93丁ウ

138
女もかゝる御心のほとを見しり聞え
て過たりとおほすはかりのことはしい
てす又いたくひけせすなとして御
心をきてにもてたかふ事なく
光君をしなへてのやうにはもてな
し給はぬほとを明石上見知まいらせ
てよのつねの女ならは其愛に乗
して過分のふるまひもあるへきに
さはなかりし有さま是亦世の人」94丁オ

に見習せんの心にてかける也さり
とていたく卑下したらんもかく
もてなし給ふ御心にたかふへしよ
きほとをはからひて光君の御こゝ
ろをきてにたかはぬさまこれ男」94丁ウ

女の間のみならす君臣の上にもお
もふへきをしへにや

139
其ころおほきおとゝうせ給ふ

140 微意ありおくに委記す
おほやけさまに物のさとししけく
のとかならて　光君は冷泉院の
実父にておはしますを帝し
ろしめさて臣下とし給へるを
天にとかめて天変しきりに
さとししめすさま也上一人より下
万民まて親を敬せすはあるへから
すとの教を書也みそか事の
父子の間にて聊もしらせ給はて
さへ仏天のとかめありいはんや
よのつねの親子の中に敬せ
す不孝のわさあらはいかて天罰
をまぬかるへきをそれつゝし
むへきのいましめなるへし
141 いよ〳〵御かくもんせさせ給ひつゝ
朱雀院の御代におほちおとゝ
文才うとくおはせしにかはりて
当代には常に文学をつとめた
まひしさま也弥といふに心を付へし
142 秋のつかさめしに太政大臣に成給ふ
まへにおほきおとゝのうせ給ふこ
とを何となく書いてたるはこゝ

」95丁オ

」95丁ウ

」96丁オ

にて光君をたふとみて高官
になし給ふへき事をかくへき微意
なるへし作物語のかきさま奇妙
にや是は先有増にて実は乙女
巻にて任し給へり
143 前栽ともこそのこりなくひもとき
折節の景気を何となくいひ出給へる
もつき〳〵しきのみならす野宮の
事なといひ出給はん便りも面白く
ことにはおくに春秋の勝負を
いとませまいらせて秋好むの御
心を見給ふよしを書て乙女巻に
至りて六条院に四まちをしめ
て四時の興をつくりなし給ふ事
をかくへき微意なるへし
144 いつかたにか御心よせ侍るへからん
三光院説云此段こてふの巻と野
分巻とを書出へき序とみえたり
145 はかなうきえ給ひにし露のよすか
にも思給へられぬへけれ
秋好の御母御息所のうせ給へる事
秋なれは心よせあるよし也大事
なる返答をかくいひなせる殊勝

」96丁ウ

」97丁オ

」97丁ウ

也と細流の説也（予案）斎宮女御
（徽子）のうたに袖にたに秋の夕は
しられけりきえし浅茅の露
をかけつゝ（新古今）といふありこれ
村上天皇をおほしめす心也此秋好を
斎宮と申せは此詞も比してかき
つらねたりとみゆ餘情幽玄にや
146 しのひかたき折〳〵も侍しと聞え給ふ
光君実には斎宮ををかしまい
らせんの心はあらぬよし物かたりに
みゆ然とも好色の人のくせにて
かくたはふれことの給ふさま也この
次にかうあなかちなる事に
むねふたかるくせの猶有けるよ
と我なからおほしらる是は
いとにけなきこと也なとあり
」98丁オ

147(20) 朝顔巻
宮わつらはしかりしことをおほせは
御返りもうちとけて聞え給はり（ママ）
あさかほの斎院也一生源氏君
に難面きさまにて過し給へり
人は心さしを立へきいましめに
て書也あまたの御かた〳〵源氏
」98丁ウ

にはみたり給へりしに一人此斎
院のみ人に似しとおほしさた
めしとなり
148 さすかにしたつきにてうちされんと
は猶おもへり　源内侍今尼になり
ても猶生得の好色のくせやまぬ
さま也いとみくるしき有さまを
興言にかきて老人の心つかひ
いましめとするなるへし
」99丁ウ

149 まいてうちあたけ過たる人の年つも
りゆくまゝにいかにくやしき事多からん
若きほと物の心も深くしらす世
のあさけり何かをも顧（カヘリミ）る遠慮す
くなきほとのすさひに好色の
人のわかあたし名を流すのみな
らす人の名をもくたして年より
て後まことの智出来て悔しき
ことおほきよしをかきて人の平
生をたしなむへきいましめを云なる
へし
150 もらさしとの給ひしかとうき名の
かくれなかりけれははつかしうくるしき
めをみるにつけてもつらくなん
」100丁オ

薄雲女院夢にみえて光君に
恨み給ふ詞也もらさしとちかへる
ことも我しる汝しるをのつからよに
隠れなき物なれは心中になす悪
念も終にはもるゝ習ひとしりて
かねて正心誠意の修行をこたる
ましきわさ也との教なるへし下賤
の人とてもすこし志をたて身を
もたてんと思はん人は後名を恥へき
に悪念をひるかへして内にかへりみて
やましからぬやうにあらまほしまし
て高貴の人自棄して放埒すへ
からす必後悔すへし後悔の期に
至りては千たひくひてもかひなし
かねて覚悟してつゝしみをそる
へきわさ也
（遊紙2丁）

」100丁ウ

」101丁オ

」101丁ウ

〔附記〕本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・翻刻・複写等にご高配を賜りました各所蔵機関、『源氏物語微意』の閲覧・翻刻をお許しくださいました日本大学総合学術情報センターに深謝申し上げます。
なお、本稿は平成二十五年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号25・1422）の成果の一部である。

（みやがわ・しんや　本学大学院博士後期課程）